
IS(インフィニット・ストラトス) 勇者光臨

ガオガイガー最高！ジェネシック最高！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス
IS 勇者光臨

【NNコード】

N9410Y

【作者名】

ガオガイガー 最高！ジェネシック最高！！

【あらすじ】

君達に最新情報を公開しよう彼の名は獅子王 聖心彼は彼女とのデート中に彼女を助けるために死んだラストは口付けで彼の人生は終着駅に着いたが彼は神によって転生を果たす

そして我等が勇者 獅子王 凱を相棒に

IS世界に勇気を巻き起こす

そして彼は勇者王を操る勇者となる

インフィニット・ストラトス
IS 勇者光臨

君もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

ズズズツ・・・ゴ・・・クツ

適当に店で買った紅茶を飲みながら新聞を読む

・・・よし宝くじ1等当たつた

『今さり気なく凄い事言つたよな?』

「そうか?あつ2等と3等も当たつた」

『・・・牛丼食べて良いか?』

「宝くじから一気に牛丼かよ!?」

俺の名は獅子王 聖心

俺の名は親が本当は清らかな心で清心としたかつたらしいが
間違えてこうなつたらしい

因み牛丼の話をしたのは俺の相棒 獅子王 凱だ

つつても凱はISのAIだがGストーンの力を使って実体化が可能
何それ恐い・・・

因みに俺は前世の記憶がある

いわゆる転生者だ

はいはい皆様うわあ・・・有りがちとかお思いでしょ?

それは作者に文句言つてください

まあそれはさて置き俺はなんと彼女とのデート中に彼女が車に引かれそうになつたんで

俺が思いつきり突き飛ばして助けては良いんですけど

代わりに俺が死にました

で・・・最後に深くて熱いキスをして俺は息絶えました

ほんでお次は目を開けたら土下座してるじいさんがいました

俺はなんか死ぬはずじゃあなかつたので俺はIS世界に転生する事に
が俺を死なせて詫びとして特典もらいました

それは俺が生前彼女と共にハマっていた

『勇者王 ガオガイガー』を貰いました

でもねなんと！全ガオガイガーになれるという最高なものに！！

しかもサービスでA.Iとして獅子王 凱をつけてくれました

ついでに適正はGGG SSSの上らしいです

でもGがなんでSより上なんだ？

良いんだよ！！Gが最高なんだよ！！！

え？身体能力は良いのかつて？

大丈夫だよ俺リアルバグチート人間つて言われてて

勇者つて異名有つたから

最高じゃね！？異名！？！？

後獅子王マジつて名字も前世からだぜ？

いや本マジ氣で

「・・・あつ・・・」

氣づくと凱は紅生姜をてんこ盛りにのせた牛丼に更に唐辛子をかけていたが

蓋が外れてドパッて感じで出た

「・・・いける？」

「・・・見せてやるぞ・・・勇気を・・・」

「確かに勇氣要りそつ・・・」

そつ言つて一気に牛丼を食べる

「・・・ど、どう？・・・」

「・・・う、美味い！？！」

「マジですか！？凱機動隊長！？」

「ああ！？こんな事ならゆつくり食べれば良かつた・・・」

「お代わり準備じとくよ
「おお！有難う！－！」

クラスメイトに男子一人

どうも獅子王 聖心です
俺は今IIS学園に居ます

クラス中の女子から視線を集めている状況です

『精神的に辛くないか?』

問題ない彼女の泣き顔に比べたらどうって事ない

『泣き顔に弱かつたんだな』

ああこの世が終わるみたいな顔するからわ
なんかそんな顔見たくなかったんだ・・・

「し・・・獅子王君!」

『心呼んでるぞ』

「あつはい(サンキュー覬)」

俺の目の前には明らかに童顔な先生が居た
・・・女性としての部位が異常だな

興味ないけど

「あ、あの獅子王君の挨拶の番なので・・・そのお・・・」

もじもじしながら小声で俺に話す先生

『解りました』

俺の名前は獅子王 聖心

年は18歳

IISが動かせると解つて転入させられた者だ
趣味はお菓子作りに読書、音楽演奏主にやるのはオカリナとチョロ

だ

「え！？年上！」

「お兄様ああ～！」

「私のために愛の曲を奏でて～！～！」

俺の周りの女子に騒がれた

『凄いなこれは』

「（凱はなかつたのか？）」

『ああ俺にはなかつた』

そしてSHRは終わり休み時間無しで1時間目が始まり
授業は終わった

俺が椅子に腰かけているところある奴が近づいてくる

「あの獅子王先輩？」

「君は確か・・・織班君だつたかな・・・？」

「あ、そうです先輩は今までは何処の高校に行つたんですか？」

「（凱何処だつたけ？）」

『藍越学園だろ？』

「（ああサンキュー）藍越学園だ」

「え！？マジですか！？俺もそこに受験しようと思つたんですけど

受験場所を間違えてIISと藍越つて似てるからね

「ああなるほどIISと藍越つて似てるからね

「そうですよね後俺の事は一夏でいいです」

「俺の事は聖心でいい

「はい聖心先輩

「ちょっとといいか?」

すると一人の女子が話しかけてきた

「纂?」

「話がある」

「あ、ああじや あちょっと行つてきます聖心先輩
「ああ、いつてこい」

一夏は彼女に連れられ教室を出て行つた
そして一人は授業が始まる前に戻つてきた
そして授業がスタートした
が2時間目が終了し俺が一夏と話していると・・・

「ちょっとよろしくて?」

髪がロールヘアの女の子が話しかけてきた

「え?」

「ん?」

「まあ!なんですか!そのお返事は?

私に話しかけられるだけでも光栄なのですからそれ相応の態度とい
うものがあるのではないかしら?」

「イギリスの代表候補生セシリ亞・オルコット」

「あらそちらの方は知つているのですね?」

「まあなイギリスの代表校候補生だらう」

「質問いい?」

「下々の質問に答えるのも貴族の役目ですわ」

「嫌俺は先輩に聞いたんだけど・・・代表候補生って何ですか?」

俺は解つていたが軽く呆れた
セシリ亞は軽く怒つた

「あなた本気で仰つてるますの！？」

「おう知らね先輩お願ひします」

「はいはい簡単に言えばエリの国家代表生の候補生さ
まあ傍から見ればエリートだな」

「へえ～」

「そうですわ！エリートですわ！貴方方とは違う入試試験で
唯一教官を倒したエリートなのです！！」

「俺も倒したぞ教官」

「同じく」

「え！？」

セシリ亞は声を上げた

「私だけと聞きましたが？」

「女子だけで事だろ？」

「男子は別だつて事だろ？」

ピシッ

セシリ亞の額に何かが走つた
その時チャイムが鳴つた

「くつ！覚えてらっしゃい！！」

セシリ亞は自分の席に戻つていた

「一夏も席に戻れ」

「はい先輩」

一夏は自分の席に戻った

勇者王誕生！

先程の授業でクラス代表を決めるはずだったんですが
女子が推薦したのは俺と一夏

それに異論を唱えたのはセシリ亞だった

それで俺と一夏は1週間後戦う事になった

『・・・心・・・』

「（どうした？凱？）」「

『俺達の部屋ってどうなるんだろうな・・・』

「（でもさ凱は良くね？AIだし）」「

『まあそうだが・・・牛丼はどうしたらいいんだ・・・』

「（どんだけ好きなんだよ・・・）」「

この後山田先生が来て俺は一人部屋という事になった
1026室だ

俺は廊下を歩き部屋を探す

さつきから異常に凱の機嫌がいい

1人部屋だから実体化できるからだろう

「ハハか・・・」

俺はドアを開けて中に入った

・・・ゴシゴシ・・・・豪華すぎじゃね？

キッチンにパソコン、ソファー、ベットその他色々
無駄に金がかかってるな

「さて食材送つて置いたし飯作るか

『俺は牛丼で』

「言わずもがなだ」

凱は栄養管理とか空腹にはならないがちゃんと食事は取る

AIなのにね

後仕込みをしてる時に隣の部屋が騒がしかつた

今夜の夕食は凱のリクエストの牛丼

最近なんか牛肉の消費量が半端ない気がする

月に何キロ使つてるんだろ・・・

金は神のサービスで兆を越える額があるから問題ないけどね

俺のは大盛、凱のは特大盛+てんこ盛り紅生姜+てんこ盛り唐辛子見てるだけ口の中が酸っぱくなつたり辛くなつたりした

因みに凱は数回お替りをした

食い終わつたら凱はホログラムモードになりベットに寝そべる

・・・データウェポンですか？

俺は自分でIISのメンテをする

・・・

「う～ん・・・」

「どうしたんだ？」

「クラス代表を決める戦いが有るんだけど

どうも起動できるのがギャレオンとファンタムガオーだけなんだ

「ガオーマシンが使えないか・・・ちょっと厄介だな」

「ああ、ファイナルフュージョンが出来ないとなるとちと厄介だどうもエラーが有るみたいなんだ」

「どれどれ？」

凱はAI状態に戻りガオーマシンをチェックする

『・・・これなら1週間も有れば大丈夫だ最近メンテしてなかつたからな』

「やうが、つか凱なんで言ひてられなかつたんだよ?」

『・・・・・スマン忘れた・・・・』

「まあいいや」

俺はそのままベットに入った

・・・そして1週間後・・・

一夏は幼なじみである篠に特訓を受けていたらしく
だけどほとんど剣道だつたらしく
がここで問題発生

一夏の専用機がこない

「ど、どじょひ・・・・」

「まあ落ち着け焦つても何も変わらない」

「獅子王、お前の専用機に来ないのだぞ?」

「いいですよもう有りますし」

「ええ!?!?」「何!?!?」

「事前にもらひてます」

「や、そつか・・・・」

すると山田先生が息を切らしてやつて來た

「織班君ーきみの・・・HS・・・が届きました・・・」

「え!?!?本当ですか!?!?」

「はい!?!これが君のHSー白式です!?!」

そこに有つたのは何処までも真つ白なHS

「これが・・・俺の・・・」

「獅子王お前が先やれ」

「はい、フォーマットとフイットティングですね?じゃあ・・・」

俺は、ギャレオンを象ったブレスレットを出す

「『ギャレオオオ』！…！」

俺が叫ぶと、ギャレオンが現れる

『グオオオン！…』

「うああ…？ラ、ライオン…？」

「何だこいつは…？」

「何でいきなり…？」

「いくぞギャレオン…！」

『グオオン…』

「フュージョン…！」

俺はジャンプし、体を丸める。それを、ギャレオンが取り込み
変形を開始

ギャレオンの頭部は、胸部になり
そこから人型の頭部が現れる

前足は手となり

後ろ足は人間のよう、真っ直ぐとなつた

そして、頭部のGストーンが光る

「ガイガ…！」

「すつ…！」

「なんて、展開の仕方だ…？」

「じゃあ、先にいくぞ」

俺は脚部のスラスターを吹かし、アリーナに向かう
そこには既にセシリアがスタンバっていた

「あら逃げたのかと思いましたわって全身装^{フルスキン}甲！？」

「誰が逃げるか準備はいいか？」

「はいいつでも」

そして試合は始まった

セシリ亞はライフルで俺を捉えようとする

俺はスラスターを吹かし地上ギリギリで避ける

「くつ！ ちょこまかと！」

「当たつてやるほど俺は優しくない」

『心！』

「（なんだ凱！）」

『ステルスガオー、ドリルガオー整備完了！ ライナーガオーは3分待つてくれ！！』

「了解！」

「何をブツブツと私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい！！」

ビットのようなものを放つてくる

「生憎俺はダンスは苦手だ、ステルスガオー！！」

ビットの攻撃が届く寸前にステルスガオーとドッキングし攻撃を避ける

「なんなんですか！？ それは！？」

「こいつはエスの一部だ」

ステルスガオーで格段に向上した機動性でどんどん避けていく

そして試合開始から29分 先程から3分経つた

『ライナー・ガオー 整備完了!』

「おっしゃああ！！！ガオー・マシン！！！」

地面からはドリルガオーが顔を出した
そしてどつからかライナー・ガオーが出てきた

「なんなんですか！？」

「いくぞ！！」

ステルスガオーをページする

「ファイナルフュージョン！！」

腰のスラスターからGSライドのスマートを回転しながら噴出する
その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナー・ガオーが入つて
くる

腰を回転させドリルガオーと連結する

腕を背に移動させ肩からライナー・ガオーが入る

そして背にステルスガオーがドッキングした

ギヤレオンには鬚が付けられステルスガオーから腕をドッキングし
兜が頭部に着く

「ガオー！ガイ！ガアアア！！！」

スモークが消えガオガイガーの姿がアリーナ全員の目に露になる
背についたステ尔斯
胸部にはギャレオン
膝にはドリルがついている

「まさか一次移行!? 初期設定でそこまで戦つていきましたの
ファーストシフト！」

「嫌全然違うけど・・・」「ですがただ大きくなつただけでは私には勝てませんわ！！」

ライフルとビームを用いて一点集中で攻撃していく

「プロジェクトシルバー」

防御フィールドを展開し撃つてきたエネルギーを增幅し星の形にし桃の返す

それはそのままセシリ亞に直撃した

右腕を高速回転させながらGストーンのエネルギーを充填させる

「ブロウクンマグナムー！」

口ケットパンチのように腕を打ち出す

「な、なんですかええ！？！」

セシリアは驚きを隠せず慌しく避けるが弧を描き
ブロウクンマグナムはセシリアにヒットした

あつという間にセシリアのエネルギー残量0
試合終了勝者 獅子王 聖心
がセシリアは何故か落ちてきた
軽くスラスターを吹かし下に回りこみお姫様抱っこのように受け止
めた

顔を赤くし手をモジモジさせる

「氣にするな」

俺はお構い無しにセシリ亞をピットを運ぶ

「ではこれでなこれからは発言に気をつける」

「発言……ですか？」

おおお前は国家代表生の候補生が多かったのに国家代表になるが
もしかん」

「ならお前の発言はその国の発言になる

お前が罵倒すれば國が罵倒したのと同じ事になん

そいつはシリアの顔は青くなつていつた

「やうこつ事も考えりでまな

俺はペリヤを出た

この後原作どいつに一夏は負けた

整備室での出来事

模擬戦の後織班先生の許可を貰い
整備室でガオガイガーの整備をする事にした
まずはパソコンでガオガイガーをチェックする
・・・視線を感じる・・・

「（凱・・・）」

『ああ誰か見ている』

俺は振り向くと水色の髪に眼鏡を掛けている女の子がいた

「何の用だ？」
「・・・を・・・く・・・」
「何？」
「貴方の名前を・・・教えてください・・・」
「俺の？俺は獅子王 聖心だ」

とつあえず自己紹介

「更識・・・簪」
「君の名前かい？」
「（「クツ」）」
「じゃあ更識・・・さん？」
「（フルフル）・・・簪でいいです・・・」
「簪ね、で何の用？」
「・・・その・・・オルコットさんとの模擬戦を見てて・・・」
獅子王さんのIISがアニメのロボットみたいで格好良いから・・・
その・・・もつと見たくて・・・／＼／＼

簪は頬を赤くする

「まあガオガイガーの元はアニメだしな」

「…なんの…？」

「うーん…・・・口で言つより見てもらつた方が早いかな？まあこの後あいてるか？」

「（「クツ）」

「なら俺の部屋でそのアニメ見ないか？」

「…いいの…・・・？」

「ああ構わんぞ」

「ありが・・・とう／／／それと・・・ISが見たい・・・」

「ああ解つた」

俺はガオガイガーを合体状態で呼び出す

「…」

簪は目をとても輝かせている
キラキラしている

「好きなだけ見ていいぞ俺は整備してるから」

「…これ！？」

「ああまあな」

「私も・・・手伝つていい・・・？」

「あ、ああ」

俺はエネルギー系統を担当し簪は装甲を担当した

簪のおかげでだいぶ早く終わつた

この後簪と俺の部屋で勇者王 ガオガイガーを鑑賞した

「！・・・・・い、いい・・・（キラキラ）・・・」

「おお！解つてくれるか！」

「勇気・・・いい・・・」

「くう～解つてくれる人が居て良かつた～！！」

「出る！！」

『ヘル・アンド・ヘブン！』

「来るぞお！」

『ギム・ギル・ガン・ゴー・グフオ・・・』

この後徹夜で俺達はガオガイガーを鑑賞するのであつた
簪が帰つた後軽く凱に怒られた

クラス代表生

「一組のクラス代表は織斑君に決定いたしました！」
「へ？」

パチパチパチパチ

クラスの女子から拍手を浴びる一夏

「あの先生質問です！俺はオルコットに負けたし
ここは普通オルコットに勝つた聖心先輩が俺に勝つたオルコットじ
やないんですか！？」

「ああそれは」

「私と」「俺が」

「辞退したから」

息を合わせながら言つ俺とセシリ亞

「なんで！？」

「私もあの時はかなり自分勝手に怒つてしましましたし
それに聖心が辞退するなら私思いました」

「俺がやつたら一夏のこれからに響くと思つたからだ
まだまだ青いからな、戦闘経験を積む必要が有るだろ？

Are you OK？」

「OKです・・・じゃあ出来れば」指導お願いします

「任せろ、勇気を叩き込むからな

「はい！（ゆ、勇気？）」

そしてちよこと時間は流れ

「これより飛行訓練を開始する 織班、獅子王、オルコット前に出て展開して見せろ」

と言わされたので俺達は前に出た
すると

「獅子王、お前のEISは一タアレをやらなくていいかんのか?」「フュージョンとファイナルですか? いえ任意です」「そうかでは合体状態でいけ」「はい」

セシリ亞はさつさと展開し俺もステルスガオーラにしてガオガイガーを展開する
が一夏は慣れていないせいかモタついている

「一夏相棒を呼び出す感じだ」「(相棒・・・来い!白式!!)」

すると一瞬にして展開された

「遅い」

容赦ない織班先生

「武装を展開してみるつが獅子王は常時展開か・・・」「いえ武装は有ります」「では見せてみろ」「はい」

わずか0、09で展開したのはティバイディングドライバー

「ほうどんな武器だ？」

「お見せしますよ」

一回上昇し誰もいないグラウンドの位置に向かつ

「ディバイディングドライバー！！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させ地面に突っ込む
ババババババーン！！！シュー！！

すると地面に金色の光が走りガオガイガーを中心に100m伸びて
いく

そして地面が割れ丸く円になるように地面が割れた
みんなは呆然としている

俺はとりあえず先生の元に行く

「どうですか？」

「・・・どういう武器なんだ・・・」

「打ち込んだ地点を中心とした空間そのものを周囲へ押しのける事
によつて円筒形の戦闘フィールドを作り出し

被害を防ぐためのツールです

まあ戦闘フィールド自体は約30分間しか持ちませんけど

「・・・ではあれは放つておけば元に戻るのだな？」

「そうです」

先生はセシリ亞と一緒に向かい合い指導を始める

俺は最強勇者ロボの1体「ゴルディ」を呼び出したい欲求を抑えていた

そして授業終了

俺は整備室に向かつた

織班先生には許可は貰つた

整備室には誰も居なかつたから好都合だつた

「よし凱いいぜ」「

『了解、ゴルディマーク展開』

その声と共に出てきたのは

黄金の重装甲

逞しい腕つ節

ガオガイガー 戦闘時において最強のツールを使用するために開発された

ゴルディマーク

「よおゴルディどうだい気分は?」

『聖心よお～呼ぶなら戦闘の時呼んでくれあの女光にしてやつたに

よ

『恐ろしいを言つなゴルディ』

「使つてよかつたけどある意味で俺がタダじやすまん
それに詫びにこれから高級オイルでピカピカにすんだからよ勘弁してくれ」

『おう! それなら良いぜ! ...』

そして結局後の時間はゴルディ磨きに時間を費やすことになつた

中国からの代表候補生とアンノウンとの
勝者王新生

「転校生？」

一夏がすっとんきょうな声を上げた

「ああしかも中国の代表候補生らしいぞ
「中国か・・・」

昨日の一夏のクラス代表決定パーティの翌日即ち今日
転校生がやって来る
まあ誰かは知ってるけど
俺は然り気なく耳栓を付け耳を閉じる

「へへへへへへへへ

「へへへへへへへへ

うん何か騒いでるね

メキヤー！

・・・あんな音出るか？普通？

俺は耳栓を外し耳を開けた

すると雛が出席簿アタックを喰らうつていた

「身から出た錆・・・

『使いどころ合つてゐるか？』

・・・

「お前のせいだ！！」

「すげえ理不尽だなおいーー！」

食堂に向かっていると筈が一夏に文句を言つた
ちなみにメンバーは一夏、筈、セシリ亞、俺だ
凱には今夜牛丼作るつて事で納得してもらつた
どんだけ好きなんだか・・・

「待つてたわよーー夏ーー！」

代表候補生の鈴が現れた
が俺は普通にスルー

とつと食事を頼み食べ始める（耳栓付き）

そしてクラス代表戦

この戦いまでの日まで俺は一夏に勇者の何たるかとか
戦闘技術とかを叩き込んだ

俺は織班先生と山田先生と同じ部屋で勝負を観賞中
中々やるなー一人共・・・

「中々やりますなー夏も鈴も」

「お前の教え方が良いようだな」

「俺は勇気を教えただけです」

が戦いの中に変化が起きた
謎のI.Sが乱入してきた

「なんだ？あのI.Sは？」

「織班君！ アリーナから脱出してください直ぐに先生たちが制圧
に行きますーー！」

「 ですけど先生シールドは解除不能ですよ、俺が行きまわ
「ええ！？ダメです！！危なすぎます！！」

山田先生は俺の腕を掴み止める

「 ガオガイガ
「 凱と俺なら行けます許可をお願いします

「 ・・・行けるか？」

「 はい」

「 なら行け、だがやるからには成功しろ」

「 了解

俺は一担、外に出た

「 凱・・・任せせるぜ・・・」

『 任せろ・・・勇者として役目を果たす』

俺は髪を後ろで結んでいた髪留めを外し
長い茶髪が背に触つた

俺の目の色は黒から青に変わる

「 ・・・心・・・後は任せろ」

『 勇者の力・・・』

俺の意識はAIである凱と入れ替わった

「 ファントムガオー！！」

凱が叫ぶと戦闘機状態のファントムガオーが現れる

「フュージョン！！」

凱はGストーンの力を使いファンタムガオーのハツチからファンタムガオーと融合した
ファンタムガオーの形状は変化し人型となつた

「ガオファー！！」

ガオファー

ガオファイガーのメインブロックを構成する、その戦闘能力はガイ
ガーを凌ぐ

「ガオーマシン！！」

凱が叫ぶと

ドリルガオーライ、ライナーガオーライ、ステルスガオーライが
現れる

「ファイナルフュージョン！！」

ガオファーは黄金のフィールドを展開しガオーマシンが中に突入し
合体が始まる

ガオファーとドリルガオーが連結する

ライナーガオーは折り畳まれていたボディを伸ばし
700系新幹線の試験車のような形状になる

ガオファーの腕部は外れ背中と連結する

ライナーガオーはガオファーと合体し

ステルスガオーが背に合体し

ガオファーの肩に装備されていたパーツが胸部に移動する

そしてステルスガオーから腕が付けられ兜が装備される

「ガオー！ファイ！ガアアア！！！」

『座標軸固定』ディバイディングドライバー射出！』

代わりにAIとなつた俺がディバイディングドライバーを出す
そして腕と連結する

「ディバイディングドライバアアア！！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させシールドに突つ込む
ババババババン！！！シュー！！

空間が捻じ曲がりシールドに穴を開ける
そこにいたIISは全身装甲
しかも・・・

『いけませんね～そんな攻撃私には効きませんよ？ワドマ～ゼル？』

太くがつしりとした腕と足
色は白がベース
全身装甲のIIS

『？？いけませんね～邪魔しないでいただきたいんですけどかね～』

「問答無用だ！勝負だ！！」

地面に降り翼を元の位置に戻す

「一夏！鈴を連れて避難しろ！～」

「せ、聖心先輩！？」

「急げ！！」

「わ、わかりました！！」

一 夏は焦りながら鈴を連れて避難する

「いぐぞ！」

『負けませんね』

卷之三

2機は一気に接近し組合になる

り込む

卷之二

「安心してくださいに樂になります!』

謹はギムレッジの手を握りつぶす

『ヌワア！？』

追い討ちをかけるようにドリル一式を腹にかます

『ドワ～！？』

吹き飛ぶギムレット

「ガオファイガ一のエヴォリュアル・ウルテク・パワーを見てやるぜ！」

するダガオファイガーの腕からギムレットのパーティがギムレットの

元に戻り

新たな腕を作る

『はつはははは！』のギムレット・アンプルーレはパーティを組み替えることにより

23種類の特殊能力を使うことが出来るその1！』

右腕に光が灯る

『エクスプロジェクトレオン！』

『プロジェクトウォオル！』

エネルギー状のファントムリングを展開し防御フィールドを作り撃つてきたエネルギーを増幅し星の形にし跳ね返す

『ぐわあ！』

『ふん！』

『まだまだ！』

粉粉になつたはずだがまた元通りなり
肩には新しい武器が付いている

『その2！コロッサルコンビュステイブル！』

『プロジェクト！』

ファンタムリングを展開し腕を構え回転させる

『ファンタムオオオム！』

ロケットパンチのように腕を打ち出す

がギムレットは腹に穴を開け受け流す

『は～はは～？なあ～～』

がファントムリングがそのまま残りボディを粉碎する

「ゴルディマーク！！」

『おう！待ちくたびれたぜ！！』

ゴルディがガオファイガーの隣に現れる

『ゴルディオンハンマアアア！！発動！承認！！
ゴルディオンハンマー！！セーフティデバイス！リリーブ！！』

俺が長官と命をやる事に

「システム！チエーンジ！！」

ゴルディは上昇し上半身はハンマーとなり
下半身は折り畳まれ大きな手となつた
ガオファイガーは右腕を外し

「ハンマークネクト！！」

巨大な腕を着けハンマーを掴む

「ゴルディオン！！ハンマアアアアア～～！」

ハンマーは金色に輝きガオファイガーも黄金となつた

『凱、コアは顔の一つ田みたいな所だ』

「了解！」

ギムレットは戦車型に変形した

『特殊能力その19 シュプスタンスエクスキュゼモフ！…』

ボディの大半からなる一基のミサイルを放つてくる
ゴルディオンハンマーの前では無力
あつたりと光にされてしまった

『ハイデギョギョー…』

「ふん！」

凱は光の杭を引き抜き上昇しギムレットに突き刺し

「ハンマーへル！…

『ドオオオオ！…！…！…！』

ゴルディオンハンマーで打ち付ける

「ハンマーへブン！…ぬわあ～！…」

ゴルディの腕から杭を抜き取るためのバーツが出て
それを使い杭を抜きコアを回収し左手で握る

「光になれええええ～！…！…！」

そのままボディにゴルディオンハンマーを打ち付け
相手のエネルギーを0にし

相手を光に変換し IIS を待機に強制的に移行させた
これがガオガイガー及びガオファイガー最強のツール
ゴルディオンハンマーの威力である

が今回のゴルディオンハンマーの出力はたったの
12% であったのだ

ちなみにゴルディオンハンマーをフルで使おうとすれば
IIS のシステム全てを完全に粉碎
使用不能となってしまうほどの威力を誇る

『凱お疲れさん』

「（久々に戦つて良い汗かいてぜ）」
『それって本当に良い汗なのか？』
『それには俺も同感だぜゴルディ』
「（なんか腹減ったな）」
『凱は A.I. だろうが！！！』
「（そなたが気分的に牛丼が食いたい）」
『はあ分かったよ後で作るから・・・』
「（サンキュー！相棒！！！）」
『そなたが

主人公設定

獅子王 聖心
ししおう せいしん

年齢 18歳 (転生前) 転生後 18歳

IS適正 GGG

容姿 目の色が黒の獅子王 凱

茶色の長髪、いつもは後ろで束ねポニーテールのよつたな感じ
にしている

名は親が本当は清らかな心で清心としたかつたらしいが間違えこう
なつた

彼女とのデート中に彼女が車に引かれそうになるが思いつきり突き
飛ばして助けるが

その代償として自らの命が消える

最後に深くて熱いキスをして俺は息絶えた
そして気が付くと土下座している神と出会いそこで自分が神の過ち
によつて死亡したことを知り

神の手によってIS世界に転生を果たす

そして特典としてIS『ガオガイガー』を手に入れる

AIとして勇者『獅子王 凱』が搭載している

ガオガイガー、ガオファイガー、ジェネシックガオガイガーを装着
可能が

ジェネシックは未だ未使用

獅子王 凱
ししおう がい

聖心のIS『ガオガイガー』のAI

元は『勇者王 ガオガイガー』の獅子王 凱である

Gストーンの力を使い実体化が可能
自室ではよく実体化し牛丼をよく食べる
ISの整備を担当が極稀に忘れてしまう
聖心と意識の交代が可能
その場合、凱が聖心の体を制御下に置き聖心はAIとなりサポート
をする

・・・一夏・・・セシリア・・・何の用だ・・・

『・・・凱、もういいか?』

「ああ、じゃあ交代するだ

凱は目を閉じた、そして目の色は本来の色、黒へと戻った
凱は本来のAIに戻った

俺は目を開きガオファイガ-を解除した

そして髪止めをだし髪を束ねボニー-テールのよ-な感じにする

「獅子王、そのHSの搭乗者はどうした?」

織斑先生と山田先生がやつてきた

「いえ、こいつは無人機です」

「何?」

「先程の声はおそらくAIでしょう

ゴルディオンハンマーの一撃でAIだけが壊れたみたいです」

「そうか・・・」

「それにしても凄まじいまでの光と威力でしたね・・・

ゴルディオン・・・なんでしたつけ?」

思わず転げかける俺

「ゴルディオンハンマーです・・・」

「確かにナ・・・HSが待機状態にしコアを引き抜くとは・・・

「とりあえず」のコアはお渡しします」

俺は織斑先生にコアを渡す

「では俺はこれで少し疲れましたので・・・」
「では部屋で休め、がお前がISを展開する前と展開中は人が変わつたようだつたが
あれはなんだ?お前は二重人格なのか?」

・・・マジか・・・

「・・・いつかお話しします」

俺はそのまま部屋に戻つた

ドアを開けて中に入るとセシリアと一夏がいた

「おい何やつてる?不法侵入とは良い度胸だな」

「ちょ、ちょっと!待つてください先輩!!」「お、お待ちください...聖心さん...」

ふたりは誤解を解くようになせる

「俺はただあの時先輩が人が変わつたみたいだつたから話が聞きた
いだけで!!」

「わ、私もです!!」

・・・鋭いな・・・

「・・・何の事だ・・・せっぱり解らんな・・・」

ドカツと椅子に腰かける

「嘘を言わないでください、あの時の聖心さんは明らかに何時もと

は違います

「俺もそう思います・・・」

まっすぐとした目で俺を見る一人

『心言つてもいいじゃないか?』

「面倒な事になるぞ、凱?」

「へ?」

『それでも立ち向かうのが

『勇者・・・だろう?』

「解つたよ・・・凱出てきてくれ

俺が言つと付けていたガオガイガーから凱が出てくる

「せ、先輩!! この人は!!?」

「俺の相棒の、獅子王 凱だ」

「ようしく、一夏にセシリ亞だな?」

「は、はい」

「こ、こんにちわ・・・」

「で・・・凱さんて・・・先輩の・・・お兄さんですか?」

「まあ・・・そんなところかな? 俺は昔事故にあってな
ある科学者のお陰でこのHISにAIとしているんだまあ必要に応じ
て心に入れ替わることができんだけどな」

「ええ!?」

「じゃ、じゃあ先程の戦いは!?」

「そ、凱と俺と入れ替わって凱が俺の体を制御下に置き俺はAIと
なつてサポートしてたんだ」

一夏とセシリ亞は以前啞然している

「まあこの事は内緒で頼む」

「「わ、解りました……」

そして一人は去つて行つた

「……心大丈夫か?」

俺は椅子に体を大きく沈めていた

「……ああ……」

「元々実体であつた心が意識を電子データに分解し再構築するのは精神的には大きくダメージを与える……やはり俺が我が儘さえ言わなければ……」

凱は肩を大きく落とす

「氣にするなよ……俺は後悔していない……凱……相棒なんだから俺にもつと我が儘言つていいんだぜ?」

「心……」

「さあ……約束だから特製の牛丼作るか……」

勇者アンケート

「どうも初めての方もお久しぶりの方も心の相棒の獅子王 聖心です
だ」「どうも初めての方もお久しぶりの方も心の相棒の獅子王 凱

「さあ今日は作者であるアルト・アイゼン・リー・ゼからメモを預かつておりますか」

「いきなりだな」

「まあいつもの事らしいし、えーっと・・・

『今回は一夏をはじめとする専用機持ちに勇者を付けよ!』と思つているのですが

誰に誰を付けようか?』といふ事です、以前簪を勇者につけた感想を頂きましてどうせなら

勇者いるだけ勇者になつてもらおうと思つて』・・・だつてさ

凱

「つまり、一夏達強化のために氷龍、炎龍、雷龍、風龍、光龍、闇龍、ボルフォッグ、マイクを付けるつて事か?」

「そういう事、因みに氷龍、炎龍、雷龍、風龍、光龍、闇龍、雷龍と風龍、光龍と闇龍は一緒にするらしいついでに
」も候補に入れらるらしいつてかつて勇者だつたけ?」

「まあ一緒にするつて事はシンメトリカルドッキングするつて事で

いいのか？

別々でもいい気がするけど・・・

「俺はそう思つから問題ないと思つぞ、凱、ではここで例えを紹介します」

一夏 マイク 1票

筈 氷龍と炎龍

鈴 風龍と雷龍 1票

ラウラ ボルフォッグ 1票

1人3票までです

「「では皆様の」」参加お待ちしてます」

勇者王対勇者王

ある日の放課後

一夏とセシリアだけではなく篠、鈴、織斑先生、山田先生に話した、そしたら

「お前達はどちらが強いのだ？」

つと織斑先生に言われたため凱と模擬戦をすることになった

「なんか大変な事になつてきたな・・・凱・・・」

既に実体化している凱に話しかける

「確かに・・・」

多少呆れながらもエロアーマーを装備した凱が言つ・・・

『何をしていいー。やつをと展開せんかー。』

先生の怒涛の声が響く

「「はあ・・・」

同時に息を吐く

やつぱり相棒が凱でよかつた

「俺はギヤレオンと戦うがいいか？」

「いいよ、ガオファイガーとガオガイガーは強化したから性能は互

角だし」

お互にファイティングポーズをとる

「ファンオムガオー！」「ギャレオオオン！』

ファンオムガオーとギャレオンが現れる

「「フュージョン！」「

凱はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み、変形を開始
ギャレオンの頭部は胸部になり、そこから人型の頭部が現れる、前
足は手となり

後ろ足は人間のよつに真つ直ぐとなつた、そして頭部のGストーン
が光る

「ガイガー！』

俺はGストーンの力を使いファンタムガオーのハッチからファン
ムガオーと融合した

ファンタムガオーの形状は変化し人型となつた

「ガオファー！』

そして・・・

「「ファイナルフュージョン！」「

ガオファーは黄金のフィールドを展開しガオーマシンが中に突入し

合体が始まる

ガオファーアとドリルガオーが連結する

ライナー・ガオーは折り畳まれていたボディを伸ばし
700系新幹線の試験車のような形状になる

ガオファーアの腕部は外れ背中と連結する

ライナー・ガオーはガオファーアと合体し

ステルスガオーが背に合体する

ガオファーアの肩に装備されていたパーツが胸部に移動する
そしてステルスガオーから腕が付けられ兜が装備される

「ガオ！ ファイ！ ガアアア！！！」

腰のスラスターからGSRライドのスマートを回転しながら噴出する
その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナー・ガオーが入つて
くる

腰を回転させドリルガオーと連結する、腕を背に移動させ肩からライナー・ガオーが入る

そして背にステルスガオーがドッキングした、ギャレオンには髪が
付けられステルスガオーから腕をドッキングし

兜が頭部に着く

「ガオ！ ガイ！ ガアアア！！！」

向き合う勇者王

「・・・」

沈黙と停止・・・

俺はファンタムリングを開けし腕を構える

凱は腕を振り上げファントムリングに通す

「「ブロウクンファントムーーー」」

口ケットパンチのように腕を打ち出す双方はぶつかり合い激しい衝撃波を起こす
がお互いのファントムリングが砕け散り腕は戻つてくれる
俺と凱が走りながら腕をドッキングさせる

「うああおーーー」「おおおおーーー」

双方のパンチが頬にヒットし兜の口の部分が少しひび割れる
刹那、お互いに膝のドリルで攻撃するがまったく同じタイミングで
ドリル同士がぶつかり合つ

「これならどうだー電撃拘束ー！プラスマホールドーーー」

左手からブローテクトショード展開の際に発生する反発的防御フイールドを反転させ
ガオガイガーを拘束しそのまま投げつける
そして倒れた隙をつき

「ブロウクンマグナムーーー」

攻撃を仕掛けるが空中に逃げられる
そこで凱は予想外の行動にてた、右腕を赤く光らせ、左腕を黄色く
光らせている

「ヘル・アンド・ヘヴンーー空中でーーー」

が凱の狙いはそこでは無かつた狙いは俺の同様を誘う事

そのためにヘル・アンド・ヘブンを囮に使つたのだ、その一瞬の隙をつき

プロウクンエネルギーが充満した腕で殴りつけガオファイガーを倒すそして

「ヘル・アンド・ヘブン！！」

その隙を使いヘル・アンド・ヘブンを発動

「ならこちらも！ヘル・アンド・ヘブン！！」

お互にヘル・アンド・ヘブン発動

「「「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・・ムウン！！」」

お互いの体が新緑の色に変化しファイナルフュージョン時に発生させるEMトルネードを利用して

目標を拘束しようとするが既に双方が突撃しているので意味を成さなかつた

そして双方の拳がぶつかり地面が抉れエネルギーが溢れ出す

「「勝利するのは・・・勇氣ある者だあああ！――！」」

更にエネルギーが上昇していくが、ガオガイガーの腕にヒビが入り始める
行ける！――

が・・・ヒビが入ったままの腕はガオファイガーの腕を粉々にしガオファーを捕られた

腕は奥まで入り込む凱はそのまま腕を引き抜いた

ガオファイガーは大爆発を起こす

爆発がはれるとそこには仰向になつた凱と聖心がいた

「つたくあぶね～あぶね～あとちょいで負けるとこだつた・・・」

「まさかあそこでドリルニーを食いつとは思わなかつたよ・・・」

ヘル・アンド・ヘヴンが奥まで入り込んだ時にドリルニーでの零距離攻撃が成功し

お互いのエネルギーを0とした

獅子王 聖心VS獅子王 凱

聖心 通算 49勝 50敗 1引き分け

凱 通算 50勝 49敗 1引き分け

千冬の疑問

私の名前は織斑 千冬、このIS学園で教師をやっている身だ

IS学園には今私の弟である一夏と『ガオガイガー』といつ名の全
身装甲のIS操るもう一人の男子

獅子王 聖心がいる、そしてISのAIであり聖心の兄である獅子
王 凱

この一人が今の私の悩みの種だ、私はパソコンで今日の夕方行つた

獅子王 聖心がと獅子王 凱の

模擬戦が映し出されている

・・・

『つおおおーー』『おおおおーー』

双方のパンチが頬にヒットし兜の口の部分が少しひび割れる

・・・この時点での2機のパワーが良く分かる・・・

いくらクリンヒットしたと言つてもヒビはなかなか入らない、お互
いに異常な固さを持つていてるからだ

『ヘル・アンド・ヘウンー』『ならこちらも！ヘル・アンド・ヘ
ウンー』

『『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・・ムウンー』』

此所だ、私の一番の疑問は

そして双方の拳がぶつかり地面が抉れエネルギーが溢れ出す

この片手ずつが違う光を放ちそれが反発するのを無理矢理に合わせ、
そして

緑の竜巻を発生させ、スラスターを一気に開き突撃するこの技・・・
従来のISでは絶対に有り得ない威力だ、いやあつてはならない・・・

・ 獅子王がアンノウンのISに使つた武装『ゴルディオンハンマー』
とまではいかないが・・・

いやある意味ではアレより質が悪い、これを見る限りは『ゴルディ
オンハンマー』はこれの技の代用

として開発されたのだろう、凱が聖心にこの技を命中させた時、大
きく腕を敵のボディに食い込ませている

あのまま行けばおそらくはコアを抜き取るため動作だらう・・・
その前に聖心が零攻撃を行つたために腕を引き抜くしかなかつたの
だらう

おしてこの腕の光、これが気になる、あの絶大過ぎる攻撃力を実現
するこの光・・・あまり気は進まんが・・・

私は携帯を取り出し電話を掛ける

・・・暫くし・・・

『はいはーい！皆のアイドル！篠ノ之 束だよおーーーお久しぶり
！ちーちゃん！』

そう電話したのはISの生みの親、篠ノ之 束だ

「相変わらず無駄に元気なものだな、それとその呼び方はやめる」

『もう！ちーちゃんつたら照れちゃつて』

「・・・いい加減にしろ・・・私はお巫山戯がしたくて電話したの
でない

『解つてるつてちーちゃんが電話していくつて事はなにがあるの？』

「・・・まずはこれを見てくれ」

私は束に獅子王達の模擬戦とセシリ亞との模擬戦の映像を見せた

アンノウンのエリはこいつの仕業だろ？、よつて見せん

『・・・すごいね～！これ！天才の束さんでもこんな出来ないよ
「・・・それで束、私が気になるのはあの技のモーションの入る前
の腕の光だ』

『・・・ああこれね』

私の手元のパソコンでもその映像が流れている

『う～ん多分だけど、この模擬戦の前の模擬戦で使ってたこの
『ブロウクンマグナム』と『プロテクトショード』つての利用して
んだと思うよ』

「どういう事だ？」

『見た感じじやあこの技は単純に攻撃力を上げるだけだと自信の体
が持たないと思う

だから右腕は『ブロウクンマグナム』の攻撃エネルギー、左腕は『
プロテクトショード』の

防御エネルギーを使つてるとと思ひの、このエネルギーを全身に纏つ
ての威力が実現できる

でも幾ら束さんでも現状は無理だよ』

「・・・そつかではな」

ピッ・・・

・・・攻撃と防御を同時に高める・・・それであれほどの攻撃力が
実現出来るのか・・・
とにかく獅子王達はこれから大変な・・・

転校生

「今日は転校生がいます！しかも2人も！」

副担任の山田先生が言い放つと女子たちは騒ぎ始めた、そんな中に転校生が入ってきた

「シャルル・デュノアです、フランスから来ました 宜しくお願ひします」

「……………あや ああああああ……………」

女子の声が教室中に響く

「男子！ 三人目の男子！」
「獅子王さんとは違う魅力！…」
「なんかじつ守つてあげたくなるような！」

そして次の人

「挨拶しるラウラ」
「はい教官」
「ここでは織斑先生と呼べ」
「了解しましたラウラ・ボーテヴィイッヒだ」
「……………」
「え～っと…・以上ですか？」
「以上だ」

俺は先程の事でデジャブを感じながら彼女と目が合つ、そして彼女は近づいてきて

俺に平手打ちを食らわせた

「・・・私は認めんぞ！貴様があの人の弟など、認めるものか！」

「おい！先輩に何すんだよ！！！」

「貴方！..聖心さんに何をなさるのですか！..？」

一夏とセシリ亞は激しく講義する、一夏は憧れの存在であり師匠である聖心に対する行為への怒り、セシリ亞は好意を寄せる人への行為が許せない

「え？..お前が織斑 一夏では..」

「俺は獅子王 聖心だ、一夏はそつちだ」

親指で一夏を指差す

ラウラは顔を少し赤くし一夏に向かい平手打ちを食らわせた

「わ、私はお前があの人の弟だという事は認めんぞ！..」「
「だつたら先輩叩くんじゃねえ！！」

「そうですわ！！」

「う、煩い！！日本人は何故顔が似ているのだ！！もっと違ひが解
る顔にならんか！！

分かりにくい！！」

「どんだけ理不尽なんだよ！！？おい！！」

「ではHRを終わる各人着替えて第二アリーナに集合

2組と合同でIS模擬戦闘を行つ解散！」

千冬が声を上げてHRが終つた、千冬と山田先生は去つて行つた

「獅子王、織斑、お前達デュノアの世話をしろ」

「えつと・・・僕はシャルル・デュノアです宜しく

「ああよろしくが自己紹介は後だ、早く行かんと・・・」「ダメです！先輩！！廊下は既に！！」

一夏の言つ通り廊下には大量の女子で埋め尽くされていた

「・・・ど、どうしよう・・・」

「先輩、このままだつたら俺達、千冬姉の出席簿の餌食になつちやいますよ・・・」

「任せろ、ティメンジョン・プライヤーズ！！」

ガオガイガーの腕を部分展開しプライヤーズを呼び出す
3体の小型ロボ（DP-C1、DP-R2、DP-L3）が巨大な
プライヤー（ペンチ）型に合体変形する

「ツールゴネットー！」

腕と連結しペンチが開く

「シャルル！一夏！俺に拘まれ！！」「はい！！」「え！？は、はい！！」

一夏は俺の腕に拘まり、シャルルは俺の腰に抱きつく形になつた
本来のプライヤーズは異常が発生した空間をねじ切り、宇宙空間に
排除するため空間修復ツールが俺と凱の改良という名の魔改造によ
つて瞬時空間移動が可能となつた

「おおおおおおおー！！！」

次第に俺の周りの空間が捻れ聖心達は消えた

教室には女子の声が響いた
そして男子更衣室には空間の捻れが起こりそこに聖心に抱きついた
シャルルと一夏が現れた

「ふう、さあ着替えよ。」

「やつばすごいです!! 先輩は!! 流石は師匠!!」
「凄い凄い!! 聖心さん!! 凄すぎです!!」

目をキラキラさせながら俺を見る一人

「ははは、わざと着替えるぞ出席簿の餌食にならぬぞ」「はー

56

転校生（後書き）

アンケート途中結果

一夏 候補 氷龍、炎龍 J

筈 候補 ボルフォッグ 氷龍、炎龍

鈴 候補 風龍、雷龍

シャル 候補 光龍、闇龍 ボルフォッグ マイクサウンダース1
3世

ラウラ 候補 ボルフォッグ J

簪 候補 マイクサウンダース1 3世

と言った状況です

「本日から格闘、射撃実戦訓練を開始する」

織斑先生が一言、あの後スースに着替えた後少し急ぎ足がぎり間に合わなかつた

その影響かいたずらに良い所を見せられるぞ（ボソッ）

「ではさつそく戦闘実演をやってもらおう、凰！オルコット！手本を見せてみろ」

二人は小言で文句を言いながら織斑先生の近くに向かう

織斑先生のつぶやきで二人は一気に奮起した

「嫌そうな顔をするな、アイツらに良い所を見せられるぞ（ボソッ）

」

『流石先生だな、巧い心理作戦だ』

「（なんの話だよ・・・）」

そして・・・なぜか落ちてきた山田先生に一夏は潰され、一夏のスキル『ラッキースケベ』が発動鈴は怒り一夏に対して攻撃するも山田先生が見事といえる射撃で一夏を助けた

そして二人は山田先生と戦う事になり惨敗した、敗因は簡単、お互い動きを合わせようとはせず、自分勝手な行動をしたためだ、そしてセシリアは少し凹んでいた

後で慰めてやるつ

そして織斑先生の指示で俺達専用機がクラスのグループのリーダー

となり

そのリーダーに教わる

生徒が8名、因み俺は先生にラウラをサポートとしろと言われラウラのグループに入ったが一つ問題がある、先程のHRでのラウラの行動で生徒はラウラを警戒するだろう

まあそのために俺を組み込んだのだろう、まあまざは挨拶だ

「改めて宜しくな、獅子王 聖心だ」

「・・・」

ラウラはそっぽを向いている、どこか間違えたか？

「そ、その・・・先程は済まなかつた・・・

ラウラを顔を完全に俺に向けず謝罪した

『何、だいい子じゃないか』

「別にいいさ、気にしてないとにかく宜しくなラウラ・ボーデヴィ

ッヒさんよ

「私の事はラウラで良い」

「俺も聖心で構わん、さあ始めよ」

俺達のグループが使用するのは打鉄、俺はサポートしてやる事にな

つた

それにラウラの教え方が巧い事に感心している

「理論を混えながら体感的な事も付け加える、織斑先生に似た教え方だな、良い教え方だ」

俺が感心するとその言葉に反応したのが俺の方にラウラがダッシュしてきた

「当然だ！私は心から教官を尊敬しているのだー！」

「それだけで教え方まで同じとは……恐れ入る……」

「当然だ！・・・そう言えば聖心、お前も専用機持ちだつたな」

「ああ見るか？」

一
ああ

俺はガオガイガーを合体状態のまま呼び出した、ガオガイガーになると正直目線が高くなる

女子は感嘆の声を上げる

「やつぱりカツ」「いいね！獅子王さんのエヒー。」

「つづつねー胸のライオンもカッコいいしー

「でも顔が見えないのが残念・・・」

思ひ思ひの事を語つ女子達、ハカラせざひとも戦つたことこのつ田をしてくる

「ラウラ、今度模擬戦をやらないか？」

「いいのか!?」

「ああ、お互いの実力を知るのもいいだろうからな、まあ今は指導

「う、うむ、そうだな」

流石に幾ら織斑先生と書いても怒られるのは嫌らしいな

和解（後書き）

ラウラと友好的な関係を持ちました

訓練とラウラ襲撃未遂？

「ねえねえ聞いた聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「何の話？いい話？」

「最上級にいい話！！」

「今月の学年別トーナメントで優勝したら・・・」

「したら？」

「なんと！一夏君か！獅子王さんと付き合えるんだって！」

「俺達がどうかしたか？」

「キヤー…………」

「何だ・・・失礼な・・・」

なにやら騒がしいな・・・俺と一夏は教室が出ようとした時にやら女子が騒いだ

が俺達はそんな事に構わずに俺達は訓練のためにアリーナに向かった

「さて一夏、訓練と行こう」

「はい！師匠！」

「・・・師匠はやめろ・・・」

「え？獅子王さんって一夏の師匠なんですか？」

シャルルは可愛く首を傾げる

「ああってか一方的に師匠って言われるだけだけどな

「へえ～」

そして俺と一夏は訓練を始める事にした

「では今回は集中力アップを目的とした訓練だ」

「しゅ、集中力？」

「うむ、今回は銃を使うが、一夏の白式には銃はない、という事で

俺の銃を貸そう

（凱、メルティングガンとフリージングガンを出してくれ）

『了解』

すると俺の手にメルティングガンとフリージングガンが現れる

「おおーーー！」

「赤いのがメルティングガン、青いのがフリージングガンだどっちか選べ

もうお前でも使えるようにしてある

「じゃ、じゃあメルティングガンで！」

一夏は喜び勇んでメルティングガンを握った、構え方などを教えて一夏は的に目掛けてトリガーを引いた

バシュン！！メルティングガンは超高熱工ネルギーの弾丸を発射し的の少し端を捉える

「ん、難い・・・」

「一夏、もう少し肩の力を抜いて」

「ん？こうか？」

シャルルが手取り足取り銃の撃ち方をレクチャーしまともに出来た

所で一発一発に自らの意識を移すように

打つように指示し集中力の向上を図る

すると急にアリーナ内が騒がしくなり視線が集まっている方に視線を移す、そこには先程友人となつたISを展開したラウラが居た

「・・・私と戦え」

「ふざけんな、俺は今訓練してんだ、てかやる意味がない」「貴様に無くとも私にはあるのだ」

ラウラは鋭い視線を一夏に向ける、俺はため息を吐きプライマーの瞬間移動を応用した高速移動を使いラウラの真横に立つ

「よおラウラ、先程ぶり」

「！？・・・あ、ああ先程ぶりだな、聖心・・・」

「ここで戦うのもいいが、ここでは他の生徒がいて邪魔になつて本気で戦えんぞ？」

それに織斑先生に面倒がかかるぞ？」

「そ、それはいかんな・・・」

「では、次の機会にな？・・それにしても・・・」

「な、なんだ・・・？」

俺はラウラのIISを見る、恥ずかしそうにラウラは少しうつむたえる

「カツコいいな、ラウラのIIS」

「そ、そうか？」

黒がベースになつておりとてもクールでカツコいい

俺も黒が好きだ、黒が好きになつたのはジェネシックの影響だがな最高じゃね！？ジェネシック！？「それは最強の破壊神、それは勇気の究極なる姿」

「クールで気高く、雄々しくて、俺は好きな方だな、メインカラーも俺好みだ」

「・・・！？そ、そうか！私のシュヴァルツェア・レーゲンはクールで気高く、雄々しいか！？」

自分のIISを称賛されて嬉しいようだ

「じゃあ今日は引いてくれ、今度は俺が邪魔にならないように一夏と戦える舞台を用意しよう」

「そ、そうか、では・・・織斑一夏、今日は友人の聖心に免じて今回は見逃してやる」

そう言つてラウラは去つて行つた

この後俺は他のメンバーに質問攻めにされセシリアと休日に買い物に付き合わされるハメになつた
俺は訓練を終えると整備室に向かつた、友人との約束を果たすためだ

簪のHS（前書き）

今回、とうあえず皆の勇者が決定！
今日は簪です

俺は整備室で簪のI-Sの仕上げにかかっている
簪がガオガイガの整備を手伝ってくれたお礼だ、簪が凱見たときは目をキラキラさせてたな
俺は考へている事がある

「簪、提案があるだけどいいか?」

「何?」

「I-Sに相棒が欲しくないか?」「相棒?」

簪は首を傾げる・・・可愛いな・・・

「ああ、俺と凱みたいな感じで」

「・・・いいかも・・・(キラキラ)」

「うーん・・・誰がいいかな・・・」

『イツシミー!...!』

するとホログラム状態でコミカルなコスモロボ形態のマイク・サンダース13世が出てきた

「マイク! 勝手に出て来るなよ!」

「Oh~それはsorryね~でもマイクは簪とfriendになりたいもんね!」

「はあ~・・・すまんな簪・・・驚かせ・・・て?」

簪はマイクを見て嬉しいそうだ

「（キラキラキラキラキラキラキラキラ）・・・私、簪！宣しく・・・マイク・・・！」

・！マイブ・・・・！

— . . . ! ! !

マイクは簪の肩の上に移動し戯れている

・・・まあ簪のパートナーはマイクでいいか?

卷之三

卷之三

マイクはバリバリーンを操作し簪のISに飛び込んだ
そしてISはGストーンの光を放ち始めた

「…うん…」
「…マイクが待ってる」
「…」

簪はISに手を伸ばし触れた、そして簪も暖かなGストーンが放つ命の光に包まれた

カーリーのようないわくが追加され

両膝部分にはマイクロフォン型サウンドツール『ドカドカーン』

言つなれば打鉄式式とマイクの融合した簪がそこにいた

「これが……私は……」

「すごいな・・・予測以上のエネルギー総数だ」

「の割には総数はガオガイガードころか超龍神にさえ届かないな」

『うつぐ！そ、それはガツツで補えば問題ないつぜ！』

「聞ひてゐる事がめちゃくちゃにも程があるわ」

「ああ、簪！」

「な、なに・・・!?

俺は手を差し出した

「ヨウジヤー、勇者の世界へ…」

「うん！」

簪は俺の手を強く握った、この世界での勇者第1号だ

「簪、今度の学年トーナメントでパートナーをお願いできるか?」

『...』

俺は簪とタツグを組んだ

始まる学年トーナメント 聖心&簪 vs セシリ亞&鈴

さてさてやつてきました学年トーナメント、俺と簪の最初の相手はセシリ亞と鈴だ

候補生同士がペアか相手にとつて不足なしつつても俺も日本の代表候補生の簪がパートナーだけだ俺達は今俺達の出番が来るのを待つてゐるが、簪は緊張しているようだ、呼吸が荒い

「大丈夫か？簪？」

「だ、大丈夫・・・心配しないで・・・」

『Oh！簪、緊張はいけないもんね～落ち着くもんね～』

マイクも相棒として役目を果たそうとしている

「・・・有難う・・・」

「・・・どうやら俺達の出番のようだ、まあ樂しそう」

「・・・うん・・・！」

俺と簪はアリーナに足を進めたそこには既にセシリ亞と鈴がHSを展開して待つていた
俺達も展開する事にした

簪は暖かなGストーンが放つ命の光に包まれ、打鉄式式の新たな姿

『サウンダース・ネクスト・オーバー』となつた

俺もガオガイガーを展開する

「ガオ！ガイ！ガアアアー！！！」

俺達はスラスターを吹かし浮き上がりセシリ亞と鈴と向かい合つた

そして試合スタート

まずは鈴が双天牙月を構え突撃してくる、先制攻撃という事だろうが、簪は肩にマウントされたGストーンのエネルギーを収束させたブレード

『G・ガーディアン・ブレード』を抜き放ち鈴と鎧迫り合いになりながら上昇していく

俺は右腕を高速で回転させながらセシリアに向かうセシリアは急激に後退しライフルで攻撃してくる、右腕で弾を弾きながら接近する

「ブロウクン！マグナム！…」

超至近距離よりブロウクンマグナムを放つが上空から降下してきた鈴によって跳ね返される

「まひ…・・・よく跳ね返せたな」

上空から簪が降下してくる

「ごめん…・・・取り逃した…・・・」

「構わないさ、簪、にしても強くなつたな、セシリア」

「ええ、聖心さんに勝ちたい一心で訓練いたしましたわ」

「さあ行こうか！セシリア！簪、鈴は任せる」

「解つた…・・・」

俺はセシリアに向かつた、セシリアはインター・セプターを展開し接近戦を行う

腕とインター・セプターが交差し火花を散らす

がセシリアは力負けし地上に落ちてしまふ、その隙を付き

「凱！ガトリングドライバー！射出！」

了解！座標軸固定ガトリングドライバー射出！』

ガトリングドライバーを腕と連結する

ガトリンググドライバーにパワーを充填させセシリアに向ける
ババババババーン！－！－！シュー！－！

シリアルを閉じ込め

それと同時にセシリアを閉じ込めていた空間が元に戻りセシリアは

俺はセシリアを優しく受け止める、俺はガオガイガ一の兜の顔の部分が見えるようにして微笑む

「大丈夫か？」

一
しやあまた後でな」

俺はセシリ亞を降ろし飛んだ

簪サイド

私は今マイクと一緒に相手と戦っている、私は握っている『G・ガーディアン・ブレード』を強く握った、この剣は勇気と私の感情によって出力が大きく左右する

そして今『G・ガーディアン・ブレード』は大きくGストーンの輝きを放っている

これは私の感情が出力を大きくしているから

私が今持っている感情は、心さんの相棒になれた喜び これだけマイクによると+の感情だと出力は大きくなり一では小さくなるらしいのだ

つまり怒り、憎しみ、悲しみ、それらの感情に身を任せるとGストーンは力を発揮するのを拒んでしまう

それが勇者の条件、怒り、憎しみ、悲しみ、に身を任せていけないそれとGストーンが認める事

これが勇者のための条件、私は更に喜びに勇気を混ぜる事で出力を更に上げる

「ま、また光が大きくなつた！？」

『簪！すげえつぜ！まさかこれほどまでGストーンが簪を認めるなんて！驚きだつぜ！…』

「…心さん…見てて…」

更に輝きが増しブレードの切れ味と破壊力が増していく
一気にGSSラスターを開いて鈴に接近し斬りかかる

「…？は、速い！くつ！…」

双天牙月で防御するがあまりの切れ味と破壊力に双天牙月は使用不能にされ

鈴は戸惑つたがその隙が仇となり『G・ガーディアン・ブレード』の一太刀がクリンヒットし
鈴のエネルギーを0にした

「やつた…・・・

『簪一最高だつぜ！』

「・・・ありがと・・・マイク・・・/ / /」

勇者対ゾンダー？

さて俺達はI-Sを解除し試合を見ている、今現在の試合は一夏&シヤルル対ラウラ&簫

何の因果が有つてあの組み合わせになつたんだ？またあの唐変木のせいか？

それにしても・・・コンビネーションがいいな、一夏ヒシャルル抜群のコンビネーションでラウラと簫を追い詰める、ラウラのI-Sの厄介な武装『AIC』

に簫を倒したシャルルが加わり、一方が拘束されてももう一方が攻撃し救出する

・・・そろそろ決まるか？

がラウラは言葉にならない絶叫を上げた

全身がドロドロになつていくが、不意なぜか嫌な感覚に襲われる全身の神経が一気に逆立つて、何故かゾクゾクする、まるでGストーンが拒否しているような・・・

『ゾオオオンドアアアアア！』

「『『！――ゾ、ゾンダー！――？』」

何でこの世界に！？

「凱！あれつて・・・まさか！！」

『信じたくないが素粒子Z-Oを確認した！』

「ゾンダー！？・・・心さん見て！』

簪の言われた通りに見てみるとラウラの方を見ると形状が変化しE-H-14のような形になつた、ゾンダーは対象物を決めずに周辺を破壊していく

肩のキャノン砲、ビームキャノンを辺り構わずに放ち、手首のビームマシンガンを乱射し

一夏達を襲う、一夏は雪片式型で必死に防御する、シャルルは反撃するが強固なゾンダー・バリアに阻まれダメージを取れる事が出来ない

「ちい！簪！凱！行くぞ！ゾンダーが相手なら勇者の出番だ！」

『了解！先生には俺達が鎮圧すると黙っておいた！』

「流石！手が早いぜ！行くぜ！『ギャレオオオン』－－！」

俺が叫ぶとギャレオンが現れる

『グオオオン！－－』

「マイク！」

『OKだもんね～！システムチョーンジ！－－』

「フュージョン！－－」

俺はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み、変形を開始
ギャレオンの頭部は胸部になり、そこから人型の頭部が現れる
前足は手となり、後ろ足は人間のように真っ直ぐとなつた
そして頭部のGストーンが光る

「ガイガー！－－」

簪は『サウンダース・ネクスト・オーバー』を展開する
どうやらマイクは待機状態からの移行をシステムチョーンジと言つて
いるようだ

腰のスラスターからGライドのスマートを回転しながら噴出する

その中にドリルガオー、ステルスガオー、ライナーガオーが入つて
くる

腰を回転させドリルガオーと連結する、腕を背に移動させ肩からラ
イナーガオーが入る

そして背にステルスガオーがドッキングした、ギャレオンには蠶が
付けられステルスガオーから腕をドッキングし
兜が頭部に着く

「ガオ！ガイ！ガアアア！…！」

『座標軸固定ディバイディングドライバー射出！』

ディバイディングドライバーを出し腕と連結させる

「ディバイディングドライバアアアア！…！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させシールドに突っ込む
ババババババン！…！シュー！…！

空間が捻じ曲がりシールドに穴を開ける

そこでは一夏とシャルルが必死の回避を行つていた

「プロウクンマグナム！…！」

プロウクンマグナムを発射しサバイバルナイフで斬りかかっていく
ゾンダーを攻撃する

胸部に直撃し装甲がボロボロと音を立てて崩れる
そこにはチュークで縛られているラウラがいた、どうやらコアと融
合してる訳ないようだ

IS自体も若干大きくなっている、ラウラは捕られているかの様に
縛られている

「一夏！俺が次、奴の胸部を攻撃してラウラが見えたらい引き出すせ！」

ラウラは自分の意志で行動していない！」

「わ、解りました！！」

ゾンダーは胸部の修復を終え、立ち上げ肩のビームキャノンを放つてくる

「プロテクトウォオル！！」

リングを展開し防御フィールドを作りビームキャノンを防ぐ
そんな事お構いなしに連射していく

ドオオン！－ドオオン！－ドオオン！－

ピシーン！－ピシーン！－ピシーン！－

するとキャノンのエネルギーが切れたのか、肩のキャノンをページ
し手の甲からロングナイフを出し
突進していく

「ガオガイガー！」

斬撃を体を沈ませて避け、カウンターで左腕で殴り付けナイフを砕く
ゾンダーは手首のビームマシンガンを構えるが発射させる前に手首
を掴み力を込める

徐々にヒビが入り、手を粉碎する

「接近戦で勝てると思うなああ！－俺の友人は返してもうつぞ－！」

「ドリル－！」

ドリル－を回転させそのまま膝蹴りを喰らわせ胸部部分を全壊さ
せラウラの姿が丸見えとなつた

「今だ！一夏！」

「はい！..」

一夏は瞬時加速イグニッシュ・ブーストを使用し一気に接近するがゾンダーは一夏に触手を伸ばす、取り込み気だ

「そーは・・・』『させないつぜーーー！カモン・ロックンロール！-！ディスクM、セットON！-！』

『ギラギラーン＼＼ーーー！』『ギラギラーン・・・＼＼・・・-！』

肩のスピーカーから特定の機械の機能を麻痺させるマイクロ波を放射する

そのマイクロ波を受けたゾンダーは各所から煙を出し触手も止まる一夏は両手でラウラをしっかりと掴みそのまま引き抜く

「聖心先輩！-！今です！-！」

「よおし！-！ゴルディマーグ！-！」

『おう！-久々の登場！-！』

ゴルディがガオガイガーの隣に現れる

『ゴルディオンハンマアアー！-！発動！承認！-！

ゴルディオンハンマー！-！セーフティデバイス！リリーブ！-！』

『システム！チエーンジ！-！』

ゴルディは上昇し上半身はハンマーとなり、下半身は折り畳まれ大きな手となつた

ガオガイガーは右腕を外し

「ハンマー！コネクト！…」

巨大な腕を着けハンマーを掻む

「ゴルディオン！…ハンマアアアアア…！」

ハンマーは金色に輝きガオガイガーも黄金となつた

「ふん！」

聖心は光の杭を引き抜き上昇しゾンダーに突き刺し

「ハンマー！ヘル！」

ゴルディオンハンマーで打ち付ける

「ハンマー！ヘブン！…ぐおおお…！」

ゴルディの腕から杭を抜き取るためのバーツが出て、それを使い杭を抜きコアを回収し左手で握る

「光になれえええ…！…！」

そのままボディにゴルディオンハンマーを打ち付け、相手を光に変換しISを待機に強制的に移行させた

シユヴァルツエア・レーゲンは元の姿に戻り待機状態に戻る

そしてコアには強力なGSTOーンのエネルギーをぶつけてコアを元のコアに戻す

が、何故この世界にゾンダーが現れたのか解らない

俺達、勇者の戦いは始まつたばかりのようだ

・・・

「・・・失敗したか・・・あの程度ではダメか
「どうやら此方側でも邪魔をしてくる様ですね
「ふふふ・・・やっぱり美しくないわね・・・あの金色のロボは可
愛いけど」

「ウイイイイイ、新たな手を考える必要が有るようだな」

勇者対ゾンダー？（後書き）

メイン人格は聖心のままです

驚きの嫁宣言と・・・ええ!?

「ええ、つと・・・今日は転校生?」って言うのかな・・・」

翌日の朝山田先生が入ってきてHRが始まった
あの後は簪とこれからゾンダー出て来る事を考えて戦略を考え
その結果、一夏達に勇者の試練を受けてもらおうと思つて
これから仲間は必要不可欠だからな、得にレイザーヘッドは使用
したいからな

「説明書はどこで見つけた？」

「さあ？」

入ってきたのは女子の制服を身にまとった
シャルルだった

「シャルル・デュノア改めましてシャルロット デュノアです宜しくお願いします」

知つてはいたがやはり見るとシャルルに会つと驚くな

「え？ 美少年じゃなくて、美少女だつたつて事？」
「ちよつと待つて！ 昨日つて男子が大浴場使つたよね！？」

ああ・・・一夏は筈に睨まれて いる

「歸心せん！ どこの事ですか！」

セシリアに詰め寄られる俺、俺が少し前に出ればキスが出来る距離だ

「待て待て近い近い、落ち着くのだセシリア、俺は昨日、大浴場を使える事さえ知らなかつた

俺は昨日、シャワーで済ませた」

「本當ですかね！？？」

「ああ、信じてくれ」

「おお、そんが見つめられると、かくも觸りたがります」

が一夏は修理が終つた甲籠を纏つた鈴に襲われる

こんなのか？

『I.S学園にて女子生徒の嫉妬により男子生徒死亡』

クラスメイトの証言

『アマタでござった』

・
・
・
面白いかも

ドゴオオオオン――――――――――――

どうやら最大パワーで『空間圧作用兵器・衝撃砲、龍砲』を撃つた

らしいな

まあ成仮せいや・・・ナシマンダブナシマンダブ・・・、煙がはれ

二十九

我が友人のラウラがシユヴァルツェア・レーゲンを展開し、一夏を救つた

「た、助かつた・・・ありがちむぐう！！」

わおつ・・・一夏の磨奪つたよ・・・しかも見た感じで察すると・・

つまりディープだね、少ししてラウラを一夏から歯を離した

「お、お前を私の嫁にする！！決定事項だ！」異論は認めんからな

「よ、嫁？婿じやなくて？」

そつちなのかと突つ込みたい俺は普通だろうか

『おそれらく普通だろう、俺も思った、俺は無性に一夏にヘル・アンド・ヘヴンをかましてやりたい・・・』

！？ちよつと凱いいいいい！？ビラしたのいつたい！？

『俺はあんな唐変木で甲斐性なしで鈍感な奴には嫌気がさすんだ・・・』
・極稀にな・・・』

さいですか・・・凱つてそんな一面もあるんだ・・・
するとラウラが俺の方に来た、気のせいだろうか？顔を赤くし少し
モジモジしている

「あ、貴方の事を！お兄ちやんと呼ばせてくだれこーーー。
『・・・はああああ！？？？？？？』

「…………はああああ…………？？？」

「おいおい！？？一気に妹キャラにイメチョンですか！？『ラウラ』さん！？

「調べた結果、私には貴方のお母様の遺伝子が混じっている事が解つたのです！」

「はあ！？母さんの！？」

実の所、俺は0歳で始めるパターンで転生した、そのため俺にはこの世界の父と母がいる

母は宇宙飛行士、父は大学の教授、しかも名前は父は獅子王 麗雄、母は獅子王 絆

おい何このガオガイガーファミリー？って思った俺は可笑しくないはず・・・

まあ・・・二人共もう死んじゃつたけど・・・

家族構成

父 獅子王 麗雄

母 獅子王 絆

長男 獅子王 凱

次男 獅子王 聖心 つて感じ、凱喜んでたな～絆母さんと生活できて

「つまり！私は貴方の妹という事になるのです！！」

「・・・え～・・・なにこれ・・・友人が一気に妹ですか・・・」

そう言つてゐる間にラウラはキラキラと目を輝かせて俺を見る・・・
止めて！そんな目で俺を見るな！

「（凱ー！どうしたらいいの俺！？）

『嫌・・・俺に聞かれても・・・』

流石の勇者でも困る問題

「（なんだよー今まで護に、凱兄ちゃん…って言われたくせにー）」
『嫌！アレは違うだろ？…？血が繋がってないし近所のお兄さん的な感じだろ！護の場合はー…？』

分かり易い説明だなあい

「（何かリアルだなおい例えが、最初はおじさんって言われたくせに）」
『それを言つなああー…俺はまだ21だ…』
「（まあそれはさておきどうしたらいいの？一夏は…・・・）」

篇に斬りかかられ、鈴に襲われ…

『まあ一夏はスルーで…・・・』
「（うんそうだな）」

ナシマンダブナシマンダブ・・・

「（ここはあれか？止めた方が良いのか？それとも家族として接するべきか？）」

『・・・家族として接して良いんじゃない？（棒読み）』
「（…おい…！…？棒読みはどうよー…？・・・じゃあそれで行きましょ）」

「ここまで5秒

「まあ…・・・こんな兄貴でいいんだつたら…・・・」

「本当ですか！？有り難う御座います！」

満面の笑みで俺に笑いかけてくるラウラ
俺も笑顔で返す、つてかこの本当に誰？
まああれだ、一夏がラウラ泣かせたら光になれええええ
！！！だな

妹よ、これからは俺に聞け！

朝6時、朝日が窓から差し込みさんさんと部屋を照らす中、俺は目覚めた
久しぶりに夢を見た、前世の夢だ、アイツと観覧車に乗つて告つた
場面だつた
あん時は恥ずかつたな

「・・・えへへへへ？」

燐室である一夏が大声をあげた確かにシャルルが女と解つたため一
夏一人のはず

「んだよ一夏・・・うるせへな・・・」

目を擦りながら一夏の部屋に行き、中を見る、一夏は愕然とし一夏
の隣には

何も着ないでシーツを羽織つているだけの我が妹、ラウラがいた
「・・・一夏・・・わつそく妹に手を出したのか・・・」

オーラだしながら一夏に問いかける

「い、いえ！違います！起きたらラウラがこんな感じに！！」

「・・・で？眞実はどうなんだ？ラウラ？」

「はい、お兄ちゃん！日本では夫婦は包み隠さぬものと聞いたものなので！」

実際にやってみたのです！――

うん、まづラウラの満面の笑み、これは可愛い癒されるレベル
それと・・・合つてゐるような間違いなような・・・

「誰に聞いた・・・」

「クラリッサっという私の部下です、日本の事をよく知つてゐる
嫁にこれが効果的だ言われたもので、はい！」

「うん、笑顔は100点だ、がそれは間違いだラウラー！」

「な、なんですとー！」

逆転裁判みたいにラウラに指をさす俺
ラウラはそんなバカな・・・って感じ・・・めつちやギャップある
な・・・

「それでは将来、元氣でいい子が産めなくなる、将来の良い家庭を
築きたいだらう？..」

「も、もちろんです！お兄ちゃん！..」

「だつたらまずクラリッサという人に聞くな！

疑問に思つたらまず！俺に聞け！メアドと電話番号は教えた通りだ、
復唱！..」

「はい！クラリッサに物を聞かない！疑問に思つたらまず！お兄ち
ゃんに聞く！..」

「よろしい！ではラウラ、まづは服を着てこい、今の時間なら廊下
には誰もいない

「はい..」

ラウラは元氣よくドアを開けて出て行った

「・・・てか番号教えたんですね

「当たり前だろ、妹に教えない兄貴が何処にいる？」

「・・・（俺は弟子なのに教えてもらつてない・・・）」

俺は一夏の部屋から出て自室に戻り朝御飯を作る
軽めの和食、それを30分ほど掛けゆっくり食べて私服に着替えた
黒い長めのズボンに赤いと金色が中央で混じり合つた半袖に明るめ
の黒のジャケットを

羽織つた、今日はある人との買い物の約束があるんだ

セシリ亞ではない、セシリ亞との約束は前の休日に果たした

俺は学園から出た、俺は駅に向かって歩き出した、優しい日差しが
俺に降り注ぐ

周りの人達は何故か俺をジロジロを見ている

俺は構わずに駅に向かう、駅の広場の中央の木の下で待っている人
がいたが
多数の男供に絡まれていた

「ねえねえ彼女どこ行くの？」

「俺達と遊ばねえ？」

「・・・無理・・・人を待つてる・・・」

嫌がるのにお構いなしに詰め寄る男供、俺はそんな男供に入つて行
つた

「あん！？何だよお前は！？」
「彼女の待ち合わせ相手だ」
「・・・心さん・・・！」

簪は途端に笑顔になり俺に擦り寄るよつに向かつてき
俺は優しく甘く頭を撫でた

「さて……」(退場) 願おつか・・・?

男供しか感じられないように限定的に殺氣を出す
すると途端に男供の顔は蒼白を通り過ごし灰色とかした

「ひいや～！～～～～～！」

まるで化け物から逃げ出すように駆けて去っていく

「遅くなつてすまんな、簪」

『○○！』ある事は一もん！今8時28

8時！

つまり俺が早く来なければ2時間も待つていた事になる

「おい幾ら何でも早く来すぎじやないか？」

・・・「あんなやつ・・・楽しんで・・・//」

しゅんつと落ち込んでしまつ簪、俺は苦笑し頭を撫でる

」
・
・
・
?

「別に怒るでないや。でも今度から僕を(けん)くな?」

1 1

「はいーー！」

俺と簪は並んで電車に乗り目的地に向かう

・・・がそれを追跡する人影が・・・セシリア・オルコットである

「ぐう～～！私の聖心さんと出かけるなんてえ～～！～～許せないですわ～！」

おいおい何時からこの物語の主人公はこの人所有物になつたんでしょうね
どうやらセシリアは一人を追跡するよつです～～ストーカーですか～～

「大きなお世話ですわ～～！」

そして一人（ストーキング者一名）はショッピングモールに到着
今回の目的は水着の購入だ、正直俺は泳ぐ気はない、海にはあまり
興味がないからな

俺達は水着売り場に来ている

「・・・心さん・・・水着を選ぶから・・・そのお・・・／＼
見てくれませんか・・・？」

「あまり参考にならんと思うが？」

「それでも・・・いい！～！」

「・・・まあ頑張つてみよう・・・ ピリコッピリコッ おつと電
話だ

すまん少し外す

俺はベンチに座り通話ボタンを押す

「もしもし？」

『お、お兄ちゃんですか？』

ラウラが早速電話をよこしてして來た

「なんだどうした？」

『『じ、実は水着で相談があるので、私は学校の指定の水着しかもつていないのでですが

他の生徒から買った方が良いつと言われたのですが、私にはどんな水着を選んでいいのか

分からないので・・・相談を・・・』

「そうか・・・ううん・・・まあ参考にはならんかもしけないがラウラなら

可愛いビキニタイプがワンピースタイプいいじゃないか？

俺はあまり詳しくないが、店員さんに聞いてみて自分に似合う物を選べばいいじゃないか？』

『分かりました！有難う御座いました！お兄ちゃん！』

ピッ、電話を切る

でも此れからは雑学を増やさないといけないな

「ちよっと、アンタ」

俺は歩き出しあうとした時、知らない年増女に話しかけられた

「アンタ此所の水着を片付けてちよっだい」

「残念ながらそれの水着に俺は触れていない、むしろアンタが触つた物だろ？」

「私の言つ事が聞けないつて言つの？なら・・・ちよっと、警備員さん」

「アンタ・・・バカ？」

すると警備員が来た

「ちよつと君、この女性に暴力を振るつたといつのは本当かい？」
「いいえ、これで証明できますよ」

俺はボイスレコーダーを取り出しがいを入れる

『ちよつと、アンタ』

『アンタ此所の水着を片付けてちよつだい』

『残念ながらそれの水着に俺は触れていない、むしろアンタが触つた物だらう』

『私の言つ事が聞けないつて言つの？なり・・・ちよつと～警備員
れい～ん』

再生しきり俺はボイスレコーダーをしまつ

「・・・これでどうですか？見ず知らずの学生を口キ使おつなんて
ね・・・ねえおばさん」

「なんですつて！～」

年増女は俺に掴みかかる

「アンタ何様のつもりよ！～」

「まだ自己紹介してなかつたか？俺の名は獅子王 聖心
男でありながら世界で2番目にHISを動かした男だ」

「・・・・・なつ・・・・・・・・」

証拠であるHIS学園のライセンスを見せて言つ、警備員を含み女も
驚く

「さあでは警備員さん？」の年増女の連行、お願ひできますね？

俺は「」の会社の社長と繋がりがありますので悪しからず

「（そ、そういえば上司が社長は世界で2番目にISを動かした男と関係があると・・・）

わ、分かりました！お任せください！」

警備員は絶望している女を引きづりながら去つて行った

やれやれ困った世の中だ、ISを使えなければ女と男の地位は同じだというのに

まあ俺は偉ぶる気はないけどとなつていてるね、俺は水着を選んでいる簪の元に向かう

「決ましたか？」

「は、はい・・・」

簪が選んだのは可愛らじいワンピース系の水着だ（ウエストの一部がシースルー）

「うんいいじゃないか？」

「！本当ですか！？」

「ああ、本当本当、嘘はつかん」

これに決め購入した、その時何か叩かれる音がしたが気にしてはいけないと思つ

「さて・・・今12時26分、ちょうど食事時だな、どうかで食事にしよひ」

「はい！」

俺と簪は近くのファミレスに入った

窓側の席に座り俺はグラタン、簪はミートスパゲティにした

少ししてスパッゲティとグラタンが運ばれてきた

「ではいただきます」

「いただきます・・・」

俺と簪はゆつくりと味わいながら食べ始めた
正直美味しかった、彼女との食事した時を思い出す
誰かと一緒に食べると美味しいものだ

「「」」馳走をまでした「」

俺達は精算を済ませてファミレスを出た

俺達は駅に行き電車に乗り学園へと戻った

「今日は有難うな、楽しかったよ
「わ、私もです・・・」

俺は自室前で簪と別れて俺は部屋に入った
にしても・・・楽しかったな・・・でもなんでだ・
買い物中なんか視線を感じた気がしたんだけどな・・・気のせいかな?

その頃・・・セシリ亞といふと・・・

「しまった・・・聖心さんへのプレゼントを選んでいたら・・・見
失つてしましました・・・」

ストーキングに失敗していた・・・

俺達は今臨海学校でお世話をなる旅館に向かっている最中だ
バスに乗っている、俺は窓側の席、でも何故かラウラは俺の膝の上
にこじんまりと座っている

がそこはまったく問題ない、寧ろ問題なのは俺の気持ちの方だ
俺は海には良い思い出がこれでもかと言つぽどない、それは今まで
海で俺を恨んだりしている輩に

決まつて攻撃されるからだ、そのおかげで彼女にも迷惑を掛け俺自
身、何度も死にかけた事がある

その為か俺は何時からか海が大嫌いになつたのだ、この世界で家族
で来ても俺は砂浜にパラソルを立て

その陰でじつとしていた、俺はいつの間にか窓に頬杖を付き窓から
外を眺めていた

「お兄ちゃん？」

はつ、いかんいかんラウラが話しかけて来たのに反応が遅れるとこ
ろだった

「何だ？」

「どうしたのですか？心無か、悲しげな顔をしていますが・・・

「ああ悪い、心配させたな

「本当大丈夫ですか？先輩？顔色が少し悪いですよ？」

俺の隣に座っている一夏も話しかけてきた

「・・・俺は海が・・・嫌いなんだ・・・

「えー？何ですか？」

「海に行くたびに俺を恨んだりしている輩に決まって攻撃されるから

どうも俺は人の恨みをかい易い人間みたいだ」

「大丈夫ですよ！お兄ちゃん！そんな奴らは私が撃退して見せます！」

「俺もです！」

「・・・さんきゅ・・・」

「よし！嫁よーここはお兄ちゃんに攻撃するという不図き者を発見次第、天誅を『』えるぞ！」

「イエス、マム！」

・・・ありがとよ・・・

俺は心の中で一人に礼を言った

『心、それだけじゃないだろ？ゾンダーが来るかもしぬないという事を考えているんだろう？』

「（・・・ああ・・・臨海学校中に出くわす「福音」とゾンダー・・・

・）の二つが気がかりだ）』

『どうする？』にも出でもらつか？』

「（いや・・・いい・・・）』

俺は警戒心を持ちながら到着した旅館に入った

どうやら俺と一夏は織斑先生と同じのようだ、おそらく消灯時間になつて俺達の部屋に女子が来ないための策だらう、正直有り難い、これなら凱も実体化が出来てゆつくりできる

一夏は荷物を置くとさつそく水着を持って駆けて行った

「やれやれどこまで行つてもガキだな、ん？獅子王、お前は着替え

て行かないのか？」

「ええ・・・俺は泳ぐ気ありませんから・・・せめて半ズボンにジヤケット羽織るぐらうして行きまますよ」

「そうか」

織斑先生も部屋から出て行つた

「凱はどうする？」

『俺はガオーマシンの整備をしてる、楽しんでこよ』

「海じゃあまり楽しめようにないけどな」

俺は一応トランクスタイルの奴を持ち、女子に引きづり込まれた時の保険だ

それと薄いジヤケットを羽織り更衣室を出る

そして外に出ると太陽が眩しい・・・俺はどちらかといえば夜型なのだか・・・

適当に歩き始めるが、何故か埋まっているウサ!!!があつた、それとひつぱつて!つという札

とりあえず俺は触るな危険といつ、札をぶつ刺した・・・うんこれで誰も過ちを起こさないだらう

そして再び歩き始める、すると一夏と同室であつたシャルロットと・

・・バスタオルお化け?がいた

何このシユールな絵・・・

「なあシャルロット・・・その・・・バスタオルお化けはなに?」

「えへつと・・・ラウラです・・・」

「・・・これが・・・?」

「恥ずかしいみたいで・・・」

「ラウラへ出てきな、暑いだろ?」

「で、でも・・・実際着てみると恥ずかしいのです・・・//」

／＼

「もう！じれつたいな！それえ！！」

シャルロットは強引にバスタオルを取った
そこには可愛いらしいビキニタイプの水着を着け、綺麗な肌にツイ
ンテールが似合つラウラがいた

「なんだ、似合つてゐるぢやないか？一瞬見惚れたぞ・・・

「そ、そですか・・・？」

モジモジとした姿に俺は軽くドキドキするのだった、破壊力が半端
ないぞ！？

「あ、ああ・・・一夏に見せてきたらどうだ・・・
「そうですね！有り難う御座います！お兄ちゃん！」

ラウラはシャルロットは引き連れ走つて行つた・・・
正直・・・鼻から愛が出そつた・・・それぐらい半端ない威力
だ・・・
・・・俺はそれから誰にも悟られないように海に面した崖に移動した
波が打ち付けている、気づけばすでに日は傾いていた・・・考える
のはゾンダーの事

これからゾンダーが行動をすればこちらも本格的に動かなければな
らない・・・

そうすれば必然的に勇者の力を使わなければならない、それはつま
り一夏達に勇者の試練を受けてもらう必要がある
正直、唯のE.Sではゾンダーに太刀打ちできずゾンダーに吸収され
るのが落ちだ

ゾンダーに吸収されず戦うにはGストーンの力を使うしかない
・・・でも正直な事を言つと皆をゾンダーとの戦いに巻き込みたく

ない

これは俺と凱、簪、俺達勇者の問題だ・・・

凱の珍しい飲酒

「聖心さん」

不意に後ろから声を掛けられたので後ろを向くとセシリアがいた

「なんだ？」

「もうすぐ夕食の時間ですよ?」「もうそんな時間か?じゃあ急いで

俺は「シフォン」旅館へまつ俺は浴衣に着替えたが、中々うまく

行かへば三住でモリタ

「セシリア、足が辛いなら我慢しなくても・・・」

卷之三

理由は簡単、正座をし手足が痺れて辛い

驗済らしい

因みにラウラは何故か俺の膝の上だ

「なあリウリ、どうして俺の膝の上なんだ？」

「それは嫁とはまったく違う絶大な安心感があるからですーもしかして・・・

迷惑でしたか・・・お兄ちゃん・・・？」

妹よ・・・涙目の中遣いなんて高度テクニックをどこで身に着けた!?(偏った知識の塊から)

その可愛さからのそれは反則レベルだぞ!?

「別に構わんよ」

俺は笑顔でラウカの頭を撫でる

ラウカは気持のよさに体を捩る・・・なにこの可愛い生物は・・・

・・・すこません一回でいいから抱きしめたいです・・・落ち着け

俺・・・

いくりギヤップが有り過ぎると言えど妹だ・・・

気持ちを落ち着け刺身に手をつける、本山葵を付けて食べる

・・・うん、この鼻を突くような感じが良いね

「美味い」

「お兄ちゃん、その緑色は何ですか?」

「私も疑問に思っていたのです、何なのですかこれは?」

そうか、外国生まれで日本の事を知らないんだつたらしじうがないな

「これは山葵って言って独特の強い刺激性のあって日本じゃ寿司や刺身にはこいつを付けて食べるんだ」

「そうなのですか・・・」

「ではでは」

セシリアとラウラは山葵を箸でつかんでそのまま口に運んだ

「あ！待て！！」

一人は山葵特有の鼻につんとくるの刺激的な辛さに涙する
が涙ながら飲み込んだ

「と、とても刺激的なお味でした・・・」

おしおし、無理すんな

俺が一人に茶を差し出すとそれをかなりのハイペースで飲み干したラウラはまだ辛そうだが、再びチャレンジしようとしている

「大丈夫か？無理するなよ、つてか直で食べるな」

—

俺は刺身に少量の醤油と山葵を付けた

「・・・ラウラ、口開けたままで」

「え？ はむつ

優しくラウラの口に刺身を入れた、ラウラはそれを噛み始めた

「…………おこしいですー」「ざら？ 河かじつかて少

「うう・・・」「たる?何かにつけて少量ならいのぞ

セシリ亞は足がかなり痺れて食事も辛そうだ

それを見た俺はラウラと同じ事をした、そして簪にもやられた、嫉妬つて怖いね

そして俺は部屋に戻り凱のために牛丼を作り、凱はそれを夜景を見ながら食べている

すると織斑先生がと一夏が帰ってきた

「あー凱さん、こんばんわっす」

「ああ、こんばんわ」

「凱、やはりお前も食事はするのだな」

「ええ、本當は必要ないんですけど、牛丼は俺の好物でして・・・」

「馳走様でした

今日も美味しかったよ、心」

「そりやどうも」

この部屋には小さいがキッチンがある、そこで寮で下拵えしておいた牛丼をここで仕上げたのだ

俺は丼を洗つ、すると一夏が先生のマッサージに入った
よほど気持ちいいのか普段では考えられない声をあげる先生

「なあ、凱、この人つて織斑先生だよな・・・？」

「そのぐらい気持ちいいんじゃないか？」

「ふう・・・一夏、少し待て」

先生は立ち上がりドアを開けると雪崩の如く6人が入ってきた
その中にラウラが居たので俺と凱は思わず頭に手をやつた

「「「ラウラ・・・そんな趣味が・・・」」

「ち、違うのです！お兄ちゃん・・・てその男は一体・・・」

「つてあれー？誰ー？」

凱に会つた事のないラウラとシャルロットは驚く

「聖心、一夏、お前らは風呂に行つて来い」

「そうします、後頼まれたものはテーブルの上です」

「じゃあ行つてくるぜ」

俺と一夏は風呂に出かけた

凱サイド

さて一人が風呂に行つたはいいが女子達は部屋に入れられ座らされた
そして全員にジュースを渡し飲んだのを確認すると自分もビールを
飲み始めた

「口止め料という事ですか」

「そういう事だ、凱、お前もどうだ?」

「では、お付き合いします」

俺もビールを一本開けて口に含んだ、アルコール分は久しぶりだ

「教官! その男は一体誰なのですか! ?」

「僕も知りたいです」

ラウラとシャルロットが声をあげた、この二人には俺の事を話して
いないからな

「ラウラ、お前の敬愛する兄の兄だ」

「え! ?」

「コイツの名は獅子王 凱、聖心の兄だ」

۱۷۰۹۷

「え～！～？す、すいませんでした！お兄ちゃんの兄上とも知らず

何故か土下座するラウラ

「別にいいさ」

「でもさ、何で聖心さんのお兄さんがここに？」

シャルが疑問に思う

— それは俺が聖心のISのAIとして生きているからだ。 —

卷之三

で生きていたんだ

「そ、そ、う、な、ん、だ、・、・、・、」

「…そひでしたか…」

一人は呆気を取られたような感じだ

「それで？君等は『夏と秋のど』が好きなんだい？」

「一歩はつ闇くば、凱

「そうですか？」これではつきりしていいんじやありませんか？」

全員の顔が赤くなる

「わ、私はそのう・・・一夏の優しい所が・・・／＼／＼」

「私は・・・私の立場の責任とお、お優しい所が・・・／＼／＼
「・・・専用機の手伝いをしてくれて・・・憧れみたいな人だから
／＼／＼

「嫁に心打たれたからです」

「・・・僕の事を守つてくれたから・・・／＼／＼

がこの答えは先生によつて一蹴された
なら聞くなよ・・・

「ふむ、一夏はやれんが聖心は別だな凱、お前から見て聖心はどん
な奴だ？」

「俺から見て？・・・言ひなれば・・・勇者ではあるが心に傷を負
つた可愛そうな弟です」

「何？」

「どういづ事ですか！？兄上！？！」

得にラウラ、簪、セシリ亞が反応した

「心はいつもペンダントをしてるのは知つてゐるか？」

「ええ、もちろんですわ」

「綺麗だよねあのペンダント」

「そのペンダントは曰く付きでな・・・昔にな心は仲のいい友達が
いたんだ（この世界で）

その友達とはいつも遊んでた、だけどある時、その子が自分のせい
で事故で死んだ

あのペンダントは友情の証なんだよ（まあ彼女との絆のペンダン
トもあるが）

そのせいで心は心に深い傷を負つてしまつて友達を作る事を激しく
嫌つた

また自分のせいで死んでしまうのではないか、そんな恐怖に囚われ

たんだ

今はなんとか立ち直っているがまた何時その事を思い出すか不安なんだ

だから心をこれからも安心させてやってくれ

全員黙つて聞いていたがその凱の問には当たり前…と強い答えを返した

その言葉に凱は深い安心感に包まれた、自分の役目は聖心のサポートだからだ

前の世界での彼女の事も気にかけていた、だから聖心の心のメンテナンスは大切なのだ

凱はビール片手に聖心の作ったつまみを食べた、千冬も食し絶賛し

「奴と結婚できる女は一生幸せだな」

つと言つて約2名の頬を赤く染め上げた

それと凱はラウラに兄上ではなくお兄様と呼ばれる事になり

凱は少し照れていた

そして二人が帰ってきた

「ふう、良い湯だつたぜ」

「気持ちよかつたな」

「お兄ちゃん！私は凱さんの事をお兄様と呼ぶ事に致しました！」

「へ？」

思わず拍子抜けした声をあげてしまった

「俺が兄だつて事言つたらこいつなつちやつて」

「ははは…・・・はあ・・・・」

「さあ、他にマッサージ受けた人いるか？」

一夏がやつしゅうと篠、鈴、ラウラ、シャルが手をあげた
そして俺は簪、セシリアをマッサージする事となつた
しばしの間の部屋で、謎の声が聞こえる事となつた
そして皆は自分の部屋に戻り俺達も布団に入った
が俺は眠らない、明日の事で頭がいっぱいだ

『心、寝ておけ、明日は大変なんだから』

AI状態に戻つた凱が話しかけてきた

「（でもさあ明日ゾンダーが来ると考えると・・・寝付けないぜ）

「作戦なら俺が考えておくから寝ておけ、お前だけの体じゃないんだぞ？」

「（そりだつたな・・・凱の体でもあるんだよな・・・ワリイもう寝るよ）」

俺は目を閉じ寝る事にした

『凱、聖心は寝たのか？』

『ああ、ぐつすりだ』

『そりだつたな・・・凱の体でもあるんだよな・・・ワリイもう寝るよ）』

『ああ、俺も準備しておこう、準備にするのこ越した事は無い』

史上最強の破壊神 降臨

翌朝、今日はIISの各種装備運用とデータの収集的な事をすることになった
がそんな時に・・・

「ち～～～ちやあん！！！！！」

現れたのはIISの生みの親、篠ノ之 束だ
織斑先生は見事しか言えないアイアンクローを決める
お～これがアイアンクローか・・・ゾンダーにも効くかも・・・
でもそれだと生身でゾンダーにダメージを与える先生が凄い事に・・・
・

「獅子王、今、失礼な事を考えただろう?」

「いえ、そんな事は」

何故か俺の考えを読まれた・・・因みに俺は先生の助手をしている
そして俺達、専用機持ちは召集された

召集理由はアメリカ・イスラエルが共同開発した軍用IIS、銀の福音の暴走

そして俺達が対象しろというものだった

俺と簪は今回ゾンダーが出て来る可能性があると視野に入れ行動する事にした

そして俺達はIISを展開し福音に向かつた
俺はステルスガオー装備のガイガーで簪はバリバリーンに乗つた状態で

しばしして見えてきたのは白・・・というより白銀か?
あれが銀の福音 シルバリオ・ゴスペル・・・速度的な問題もあり

俺と簪が到着した時には

戦闘が始まっていた、俺はすかさずガオガイガーになつたが、その時、一夏が海に落ちて行つた

俺はディバイディングドライバーと展開し海に高速を保ち突撃した

「ディバイディングドライバアアアー！」

ディバイディングドライバーにパワーを充填させ海に突つ込む
ババババババン！！！シュー！！

すると海に金色の光が走りガオガイガーを中心に100m伸びていく
そして海が割れ丸く円になるように海面が押し避けられ中心部には
一夏が横たわつていた

簪は一夏を抱き起こしそのまま飛び上がる

「第！ここは俺と簪が引き受けるー！」

「で、でもー！」

「行けえ！一夏を救いたいだろうが！？

「！…！…・・・はい！…！」

多少納得できなさそうに撤退していく

俺はディバイディングドライバーをしまい上昇する

「行くぞおおおおーー！」

福音は銀の鐘を回転しながら此所ら一帯に撒き散らした

「プロテクトウォオル！！」

ウォールリングを展開しプロテクトショード展開し銀の鐘を防ぎつつ

シルバー・ベル

福音は銀の鐘を回転しながら此所ら一帯に撒き散らした

シルバー・ベル

エネルギーを収束させ跳ね返すが、それはあっさりと回避された
簪はその回避によって生じた隙を付き『G・ガーディアン・ブレー
ド』で斬りかかる

それは体の大部分に直撃し大きく吹き飛ばす

「ファンタムリング！…プラス！」

ステルスガオーに搭載されているファンタムリングを右腕に通し、
腕の回転と連動させ
高速回転させる

「プロウクン！ファンタムッ！…」

そのまま腕を射出し福音に命中させる

福音は大きく吹き飛ぶがそこで大きな光を放ち形状が変化していく
が第一形態移行ではない、形状は大きく変化し翼は紫に染まり機体
カラーは黒と紫

パーツの一つ一つが巨大となりガオガイガーより巨大かもしれない

「凱！こいつ！」

『ああ！第一形態移行の瞬間にゾンダーが入り込んだ！』

『なら、さつさとジエネシックに移行しろ、それまでは私が時間を
稼いでやる』

「…なら頼む！凱！」

『ああ！』

「簪！少し時間を稼いでくれ！」

「…了解です…！」

『いくつぜ！カモン・ロックンロール！…ディスクM、セットON
！…』

『ギラギラーン…』「ギラギラーン…VV…！」

『ギラギラーン…』「ギラギラーン…VV…！」

肩のスピーカーから特定の機械の機能を麻痺させるマイクロ波を放射するが

ゾンダーの動きは少ししか制約できない
ガオガイガーはガイガーに戻り、緑色の光に包まれた

「では行くぞ！」

そして代わりに出てきたのは白亜の戦艦・・・全長はガオガイガーを上回る

『すでに衛星などのこちらの戦闘の記録を取れるよつた機器はすべて封じた』

「では行くぞ、フュージョン！」

すると白亜の戦艦の艦橋部分は分離し人型の形態となつた

「プラズマウイング！」

淡いピンククリアの翼が広がる

「ジェイダー！メガフュージョン！..」

ピンククリアのプラズマウイングが広がり戦艦は艦の先端を残し曲がり足となつた

そして頭部、腕部が付き、額のジュエルが輝く

「キングウ！ジェイダアアア！..」

ジャイアントメカノイド・キングジェイダー、勇者ではなく戦士の姿

『WHAT! ? OH ! ! ! 良い所にきたつぜ ! ! .』

「どうやらそのようだな、凱と聖心のじゅんびが出るまで時間を稼ぐ

5連メーザー砲 !

指部一つ一つが砲門となる5連メーザー砲を放ちゾンダーを吹き飛ばす

簪はキラキラとした目でキングジェイダーを見る

「・・・・か、かつこいい・・・・・・! ! !

「簪とやら、ここは私が時間を稼ぐ」

Jは更にメーザーミサイルを放ち動きを封じる
するとガイガーが金色の光は放ち始めた

「おおおおお ! ! !

『ジエネシックマシン ! ! !

スパイラルガオー、ストレイトガオー、ブロウクンガオー、プロテクトガオー、ガジェットガオー

全てのジエネシックマシンがジエネシックガイガーの回りを躊躇する

「よつしゃあああ ! ! ! ファイナルフュージョン ! ! !

ガイガーの腰だけが回転しGURайдのスマートを回転しながら噴出する

その中にスパイラルガオー、ストレイトガオー、ブロウクンガオー、プロテクトガオー、ガジェットガオーが入ってくる

そしてかなりスピード維持したままスパイラルガオー、ストレイト

ガオーは脚部に向かい

ドリルが膝の部位に移動し、2機のジェネシックマシンの中に足が入り固定される

腕を背に移動させ、ストレイトガオー、プロウクンガオーは尾の部分がジョイントとなり

肩の中でドッキングし胴体部から腕が出て来る

そして背にガジェットガオーが行き爪でプロウクンガオー、プロテクトガオーをしっかりと掴み、手が付けられ中から黄金に光り輝く、鋭い指が顔を出す

更に赤く光る黄金の鬚が付けれギャレオンの目が輝く
ガジェットガオーから兜が装備されGストーンが輝き、髪の毛が伸びる

「ガオー！ガイ！ガアアアー！！！」

それは最強の破壊神、それは勇気の究極なる姿、我々がたどり着いた大いなる遺産

その名は勇者王 ジェネシックガオガイガー！！

次回！究極の勇者王がその力を見せつける！

主人公設定

獅子王 ししおう
聖心 せいしん

年齢 18歳 (転生前) 転生後 18歳

I S 適正 G G G

容姿 目の色が黒の獅子王 凱

茶色の長髪、いつもは後ろで束ねポニーテールのよつた感じ
にしている

今作の主人公

転生者であり I S 「ガオガイガー」の所持者であり勇者の称号を持つ
I S の世界では0歳から始まる転生をし、前世の記憶などで天才などと呼ばれるが

本人は激しくそれを嫌っている、転生した世界でもっとも仲が良かつた親友を

自分のせいで事故で失つてしまい

心に深い傷を負つてしまい友達を作る事を激しく嫌つてしまつ
また自らのせいで誰かが死んでしまうのではないかと心の奥で恐れ
ている

現在は立ち直つていて、心の傷が完全に癒えたわけではない
心の奥の底に途轍もない規模の悲しみを抱いている

最近、妹であると判明したラウラにとても優しくしておりシスコン
気味

常に自分の言動や行動を証拠と反省するためにボイスレコーダー内
蔵型のカメラを
持ち歩いている

獅子王 がい

年齢 21

I S 適正 G G G

今作のもう一人の主人公
我らが勇者である、聖心のI S『ガオガイガー』のAIとして生き
ている
が、以前はちゃんとした肉体があり獅子王麗雄、獅子王 絆の間に
生まれた

獅子王家の長男として誕生、聖心の兄であり人類最強の勇者
心に深くひどい傷を負つた聖心の事を人一倍気にかけている
そしてその深い悲しみがゾンダーに利用されるのではないかと不安
を抱いている

AIとなつたからはGストーンの力を使い実体化が可能になつていて
実体化している間はエネルギー補給が無用であるが牛丼をよく食べる
聖心と意識の交代が可能

その場合凱が聖心の体を制御下に置き聖心はAIとなりサポートを
する

凱自身、聖心はこの学園生活で心から笑う、本当の笑顔を取り戻し
てほしいと願つている

破壊神の力

ううん・・・俺は目を覚ますと篝と千冬姉。皆が俺を見ていた俺は福音の攻撃を食らい氣を失つてしまつたらしい

「俺、福音に蹴り入れてくる」

「また、織斑、現在獅子王と更識が戦闘中だ、その影響かは分からんが映像、音声全てがキヤツチ不能となつていて」

「だつたら尚更行かなくては！！」

「・・・はあ・・・ここまで着たら聞かんからなお前は・・・専用機持ち、全員で行け、それと私もいく」

こつして再び俺達は福音がいる地点に向かつたすると緑色の竜巻が見えてきた、よく見ると更識さんが動きを止めているように見える
そして一瞬でかいものが見えた気が・・・

「あれは・・・いつたい・・・」

「あれつて・・・ファイナルフュージョンの時・・・」

そして竜巻が晴れ現れたのは全身が黒く長い髪を靡かせている赤く光る黄金の鬢、黄金に光り輝く、鋭い指
そして胸のライオン・・・あれつて・・・

「ガオ！ガイ！ガアアアア！！！」

全身から緑色の光を放ち顔の兜から不必要な熱を排出した

「ガ、ガオガイガー！？」

「つて事はアレ先輩！？」

「あれがお兄ちゃんなのか！？」

「今まで見た二種類とは形状が違うすぎる……」

「なんだか……今までとはまったく違う勇ましい感じが……」

聖心サイド

ついに光臨した最強の勇者王にして最強の破壊神、勇気の究極なる姿
ジェネシックガオガイガー……これまでの一
種類のガオガイガー
とは違う

破壊、消滅それらを司る……究極の姿……

「心、問題は？」

「ああ……いい気分だ……」

ジェネシックでは俺と凱の意識が融合する、むしろ融合した方がG
ストーンの放つエネルギーの純度が桁違いになる

JはすでにIIS内に戻った、もう時間稼ぎが必要ないからだ

福音はゾンダー化した事で異常強化された銀の鐘シルバー・ベルを回転しながら
此所ら一帯に撒き散らす

それがほぼ全弾が命中する

それは止まないナバーム弾を喰らったかのような大爆発を引き起^こ
すが

無限波動であるジェネシックオーラの鎧、ジェネシックアーマーの
前には無意味

傷一つ付ける事さえ許されない、破壊神は相手の攻撃され自らの鎧
で破壊する

そして可変翼のガジェットフェザーを開いた、そしてジェネシッ
クの姿は消えた

ゾンダーは焦つて見渡すが姿は見えずが、ゾンダーはいきなり強い衝撃と共に海面に叩きつけられた

しかも殴られた頬が光になつていて、グラビティ・ショックウェーブを放つゴルディオンネイルによつて頬の部分が光に変換されたのだ、ジェネシックはその巨体に似合わぬ異常なほど速度を発揮しそンダーの直上に移動した

「「うおおおお…！」」

凱と聖心の声と共に腹を殴られ、空中に異常な速度で飛ばされる雲を貫通し雲が一気に晴れる

そしてジェネシックは髪の毛状のエネルギー・ギア・キューメーターが煌やかな光を放ち

速度を上げジェネシックはゾンダーの内部に腕を食い込ませた

食い込んだ部分は光に変換されていき
ジェネシックは福音の操縦者と共にコアを引き抜いた
そして福音はゾンダー化が解除され元の状態に戻った
操縦者とコア、福音はジェネシックに抱かれている

「…これが…ジェネシック…」

勇者と幸せ？を告げる福音と・・・

俺はジェネシックの手と腕の部分のみを部分解除し女性とコアと福音を抱いている

俺は正直、興奮と驚きに浸っている

興奮は憧れのジェネシックになれた事、今まで訓練は鍛錬のためにジェネシックを使えなかつた

それとこれからもジェネシックはあまり使わない方針でいくつもりだなんだから？・・・IS学園とか色んな所、消し炭してもいいんだつたら使うよ？

ジェネシックのパワー・・・悔らないほうがいいよ？

ここが海だつたらジェネシックのテストも兼ねて使つたんだから何も障害無いし、あつたとしても無人島だつたり、海から突き出した岩とかだし

すると織斑先生を筆頭に俺に近づいてきた

「獅子王、その姿は何「先輩！カッコよすぎです！合体から見せてください！」

・・・人の言葉を遮るな！

先生が打鉄の武装で思いつきり一夏を殴つた
痛そう・・・てか下手したら死ぬよ・・・？

「心さん・・・カッコいい・・・//」

簪が顔を赤く染めながら言つ

「お兄ちゃん、素敵です！-」

「ウラも笑顔で言つ、ウラの場合は強烈に惹かれてくるのだから」

「本当にすごいパワーでしたね、それにスピードも圧巻です」

セシリアは素直に性能に驚いている

「あ、あんたそんなに強かったの……？」

鈴は「惑つてゐる、HSの常識を超越した戦闘風景だつたからな

「……聖心さん……やはり私にも一夏と同じ鍛錬付けてください！」

と言つ筈、実は筈も一夏と共に鍛錬している
まあ、一夏は応用編、筈は基礎編だな

「まあ、取り敢えず今はこの人を運ぶのが優勢でしょ？」

お姫様抱っこしてゐる女性を指差す、全員が了承し旅館へと進路を
進めた

そして俺はかなりの疲労感に包まれてた

戦闘中での急激なジエネシックガイガーへの移行、凱との打ち合わ
せも無しでの融合

本来、ジエネシックへの移行は待機状態で行つのがベスト
これは使用時に行えば操縦者に、精神及び肉体的に負担が有るが故
である

精神融合に置いては事前にお互いに準備を済ませた上で行つ必要が
ある

これ無しに行えば聖心に精神的に負担があるからである

これらの負担は全て聖心が負担しているため凱には一切負担が無い

が凱はそれを

『これで・・・本当に良いのか・・・』

つと感じている

聖心が負担を一任している理由は今までにヘル・アンド・ヘヴンの負担で命を削つたため

聖心が

「凱には出来るだけ負担を感じずに生きてほしい」

つという願いからであつた

俺は旅館に戻り女性と福音を先生に預けて、俺は布団に入った
異常なほど疲れと精神を磨り減つたような感覚
これがちゃんと準備を行わず移行した代償
今回は時間が求められたからしかたがない
そしてこの代償は絶対に凱には受けさせない
凱はすでに代償を払いつづけた、だから代償を払う必要はない
この代償は絶対に俺に来るようになつてている、凱でそれこの設定は
覆せない

凱には俺が一人前になつたら幸せに暮らしてもらひうんだ
この世界に転生する時、もう一つ願いを言った

凱の恋人、卯都木^{うつぎ}命をこの世界に転生させてくれと
凱は既にこの事を知つており、命と再会し喜んでいる
そしてGストーンの力を使えば凱の肉体を元に戻し、エヴォリュダ
ーとして生きていく

俺は絶対に凱に幸せになつてほしいとつとつ願いと共に眠りに着いた

そして今は俺はバスに乗り込もうとしている
まあ、友達との思い出作りとしては乐しかったな
乗ろうとする・・・

「獅子王 聖心君つているかしら?」

俺を呼んだのは福音の操縦者 ナターシャ・ファイルスだった
俺は彼女の方に近づいていた

「俺ですか?」
「ああやつぱり貴方ね・・・やつぱり、絆さんと麗雄さんに似てる
わね」
「父さんと母さんを知ってるんですか?」
「ええ、もちろんよ、二人には色々とお世話になつたから

父さんと母さんはとんでもなく有名だ、そのため俺の人脈もとんでも
ないのもこのお陰

「(今度貴方の家訪ねるから、電話番号教えて)
「(何しに来る気ですか?)」
「(ただ、信望を深めたいだけよ)」
「(いいですよ)」

俺は持っていたメモに携帯の番号を書き渡した

「ありがと 勇ましき勇者わん

チュツ?

俺の唇に触れるだけのキスをし彼女は去つて行つた

俺は処理落ちを起こしセシリアと簪そして一夏LOVENSの俺の妹、ラウラにボコられた

ナターシャサイド

絆さんと麗雄さんが自慢していた理由が改めて分かった気がした
あの子には正直、心を奪われたわ
彼に抱かれている時に、彼の顔が見えた気がしたの
勇ましく、凛々しい顔、私の好みドストライク
さあ、これから勝負よ、勇者に恋する乙女達

勇者と幸せ？を書いた筆者と・・・（後書き）

ナターシャちゃんってこんな感じでいいんでしょ？

勇者の試練その一 戦士の試練 誇り高き空の戦士と丘を騎士

本日は休日だが本日は、一夏、篠、セシリ亞、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、千冬に

アリーナに集まつてもらつた、集まつてもらつた表向きな理由はラウラのトーナメント時の変化と福音の謎の変化、この秘密を教える事

「獅子王、福音に起きた変化を教える」

先生が強い口調で俺に言つ

既に全員がアリーナに集まつている

「ええ、ラウラにも起きた変化・・・ですが条件があります」「条件・・・ですか？」

セシリ亞が疑問の声をあげる

「どういう事だ？獅子王」

「あの変化はゾンダー化と言ふ通常の工うでは太刀打ちが出来ません」

「どういう事ですか！？お兄ちゃん！？」

ラウラが驚きの声で俺に聞く

「ゾンダー化した物は周りの機械を取り込んで自らの力とする能力がある

ISにとって天敵と言つても良い、対抗で切るのは今の所、俺と凱、簪だけです」

「それはなんですか？聖心さん？」

俺はGストーンをガオガイガーから複製して取り出す
Gストーンは煌やかな光を放つ

「綺麗・・・」

「獅子王、なんだこれは？」

「これは無限情報サー・キットGストーン、ゾンダーが放つエネルギー
ーとは真逆の

エネルギーを放つ物です、俺と簪のHSにはこれが搭載されています
これが搭載されている結果俺達はゾンダーに取り込まれる事無く戦
闘が出来ます

そして皆にはGストーンかノジュエルを持つに相応しいかどうか試
練を受けてもらいます

これは強制ではありませんが、受けない限りゾンダーとは戦えませ
ん

「・・・受けたに決まっています！師匠の敵は俺の敵です！」

「私も！」

「あたしも！」

「お兄ちゃん！私もです！」

「私も！」

「・・・わかりました・・・まあ先生は受けた下さなくもいいです
つてか先生は

Gストーンが認めています、じゃあ最初は・・・一夏！お前だ！」

「はい！」

一夏は手を挙げる、そして一夏にアリーナの中心部に行きHSを開

するように指示した

俺達は客席に移動した

「（じゃあ誰が行くか・・・）」

『心、Ｊが行くって言つてるけどどうすの？』

「（Ｊが？分かった）に任せよう』

そしてガオガイガーから赤い光が放たれて一夏の前に伸びそこない
が現れる

「少年、お前の試練の相手は私だ」

「――――――アンタだれ！？」「――――誰だ？」

「彼はソルダート」 戦士だ』

「戦士？勇者では無いのですか？」

「ああだが、強いぞ」

一夏サイド

俺の目の前にソルダート」という人が目の前にいる
先輩はっさんは勇者ではなく戦士と言つてはいる、そして強いと

「少年よ、試練に合格するのには私に勝つ事ではなくお前の覚悟と
強さを私に見せろ」

覚悟と強さか・・・やつてやるぜー

「では行くぞ！スタンダップ！ジエイダー！」

Ｊはジエイダーを開き、ラズマウイニングを開いて浮いている

一夏も白式第一形態・雪羅を開いて、昨日の聖心との模擬戦の中
第一形態へと移行したがガオガイガーにボロ負けした

「いぐぜーー！」

一夏はブレードを構え大型化したウイングスラスターを一気に吹かしJに向かうが、刹那！一瞬にしジェイダーの姿は消えたジェイダーは一夏の背後で腕を組んでいる

「は、速いーー！」

「違うな、お前が遅いのだ」

「何いーー？」

急制動を掛け瞬時加速イグニッショングーストを使用しJに凄まじいまでの速度で接近する

「馬鹿、真っ正面から突っ込む馬鹿が何処に居る？しかも相手が悪すぎる」

俺が呟く

相手が悪すぎる、文字通りの意味だ Jは俺が知っている中で最強の戦士

誇り高き空の戦士・・・一夏の勝率は・・・限りなく0だJは軽く身を沈ませ一夏が水からの上を通りすぎようとした瞬間！一夏の腹部に重々しいパンチを捻じ込ませた一夏は咳き込みながら体制を立て直す

「少年、無駄な動きが多すぎる、そしてーー！」

Jはプラズマソードを展開し一夏に斬りかかる

一夏は回避しようとする

「（くつーー）人の構えだと来るのは上段からの斜めへーーー！」

一夏は自分でJの攻撃を回避しながら予測し誇り高き空の戦士の剣をブレードで受け止めて見せた

「そうだ、動きながら相手を動きを読み行動しろ、戦闘中に止まるのは自らを殺せと言っているのと同じだ」

Jはプラズマソードを納め一夏を見た

「少年よ、名を名乗るのだ」

「お、俺の名は織斑 一夏！」

「貴様の覚悟とは何だ？」

「俺の覚悟は大事な人を護るために、強くなる！」

「それが茨の道だとしてもか？」

「ああ！俺はどんな事があつても恐れない！」

！第！鈴！セシリ亞！シャル！ラウラ！簪！千冬姉！先輩と凱さん！俺の護りたい人達のために！大事な人達と生き抜くために！…」

一夏は真っ直ぐと曇りの無い眼で言い放つた

Jはそれを見据えている

そしてJはふつ、と笑つた

「いいだろう！私の戦士の試練！合格だ！受け取れ！合格の証だ！」

するとJが白式に飛び込み白式と融合し眩い光を放つ

『白亜の騎士、一夏よ！我が名を答えよ！…』

・・・キング・・・ブランカ・・・ジェイダー！…

そして光が收まるとそこにはキングジェイダーによくな形状をし

背中からは白き翼があり、右腕には戦闘用万能錨 ジェイクオス
腰には一本の剣、両腕には反中間子砲、指部が砲門になつてている1
0連メーザー砲
これがJの力を得た一夏の新たな相棒！キング・ブランカ・ジェイ
ダー

勇者の試練その一 戦士の試練 誓つ壇をぬの戦士と丘を騎士（後書き）

インフィニッシュ・ストリートス
IS 勇者光臨 NEXT

赤と青の竜と赤い椿！

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『
绚爛
舞踏』

これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その一 竜の試練 灼熱と氷結の竜と赤い椿

お次は笄の試練

既にアリーナの中心部でISHを展開している
さて・・・氷竜！炎竜！いってこい！

「「了解！！システムヒューンジー！」」

ISHから変形した状態で氷竜と炎竜が飛び出しアリーナの中心部に
着地するが

炎竜着地失敗・・・

「大丈夫か？炎竜？」

「あ、ああやつぱり僕は着地が苦手だ」

「・・・獅子王・・・あんなので相手が務まるのか？」

「大丈夫ですよ」

笄サイド

私の目の前には赤と青のロボットがいる

赤は先程着地に失敗していたが・・・これが私の試練の相手なのか？

「私達が試練の相手を致します、私の名前は氷竜」

「僕の名前は炎竜だ」

「私達の試練は貴方の勇気を見定めさせていただきます」

「勇気を見せてくれよ！」

「ではこれより勇者の試練その一 竜の試練を開始する」

私は空裂からわれを構える

氷竜と炎竜はお互いにクレーントンファーとラダートンファーを構え
炎竜がメルティングガンを構え、氷竜をフリージングガン構えて
遠近両方の体制を取る

「オラオラオラオラア！！」

「フリージングエネルギー 70%！！」

超高熱エネルギーの弾丸と超低温エネルギーの弾丸が簫に襲いかかる
空裂はエネルギー刃として放送出する事が出来る事を応用して空裂に
エネルギーを

纏わせ、放つてくる攻撃を弾いていくが、パワーがあるのか刀身が
押されている

銃撃が止むと刀身が凍っていた

「何！？」

「簫殿、勇者の礼儀としてお教え致します

私にはフリージングシステムが搭載されており凍結攻撃を得意とし
ます

「僕にはメルティングシステムが搭載されていて炎熱攻撃を得意とし
しているんだ」

「凍結・・・炎熱・・・やつかいな・・・」

「じゃあ続きと行きましょう、私達の攻撃をどう潜り抜けるか！」

「見せてもらうぜーー！オラオラオラオラア！！」

ライフルとガンを超連射を開始する

簫は基礎鍛錬で培つた回避技術を使い攻撃をギリギリまで見て避ける
そして少しずつであるが距離を詰めていく
あまづき
雨月を展開し突きをしレーザーを放つ

それは真っ直ぐと炎竜に向かう、がそれは盾のようなものに防がれる

「ミラー・シールド！！」

レーザーは吸収され、ゲージに吸収したエネルギーがグラフ状に移動し

反射して撃ち返されるが篝は避けるが体制を崩す

「氷竜！」「炎竜！」

「シンメトリカルドッキング！……！」

二人の腕は真っ直ぐに置まれ胸のパーツが迫り上がり頭部が隠れてそして合体する、ガンが腕に装着され手が出てきて、ミラー・シールドに胸に着けられる

「超竜神！……！」

「が、合体した！？」

「さあ私に貴方の勇気を見せてくれ、ダブルガン！……！」

右腕となつているフリージングガン、左腕となつているメルティングガンを

同時発射連射する、炎竜、氷竜双方のエネルギーが割り増しされ威力が更に上がつている

篝は初弾を受け止めるがその威力に圧倒されそのまま倒れてしまつ

「うぐう！」

篝はダブルガンを上昇しながら避ける

「ダブルライフル！……！」

右腰に装備されているフリージングライフルと

左腕に装備されていいるメルティングライフルを同時一斉射する

超竜神は精密射撃モードで連射をする

その攻撃を立て続々に食らい、エネルギーがついに残り一桁となってしまった

「（こ）で負けるのか？私は？一夏と戦えないのか・・・？
そんな・・・そんな事有つてたまるか！私は・・・！」

その時展開装甲から放出される黄金色の粒子によつて機体が金色に輝いていく

「ついに来たか・・・！」

『今回の試練の目的の一つが達成出来そうだな』

聖心は透明なディスプレイを見ている

そこには紅椿のエネルギー残量が表示されている

一桁だったエネルギーが次第に増幅されていき一気にエネルギーが潤つていき

エネルギーが全て回復した

これこそ紅椿の単一仕様能力

ワンオフ・アビリティ

絢爛舞踏

完全に操れるようになればほぼ無尽蔵のエネルギーが供給される事を意味する

今回の試練は勇者にするための物だけではなく単一仕様能力が使用出来るようになつてもうのが目的でもある、そして超竜神はライフルを収めた

「へどうしたのだ」

「貴方の勇気、見せてもらいましたよ、貴方の強い思いと勇気がトリガーとなり

その力を発動させたのです、私の試練は貴方の勇気を見定める事です

今の貴方ならその力を任意で使う事が出来るでしょう、貴方の願いを叶えるため

私の力を・・・お与えします

超竜神は光になり紅椿に飛び込んだ

そして光は紅椿を包み込んだが赤椿はそのままだった

「あれ？一夏のように変わらないのか？」

『申し訳有りません、今現在システムを適応化をせておりますので
しばしあ待ちください』

『新しい名前でも考えててくれよ』

「名前？そうだな・・・」

と、かなり真剣に考える篠の姿があった

勇者の試練その一 竜の試練 灼熱と氷結の竜と赤い椿（後書き）

インフィニット・ストラトス

勇者光臨 NEXT

紫の狼と勇者の妹！

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『AIC（慣性停止結界）』

これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その三 紫狼牙の試練 紫の狼と勇者の妹！

「では椿竜神はどうだ？」

『そ、そのまんまでですね・・・』

『捻りが無いな・・・』

「では・・・紅竜神？」

『それは明らかに炎竜の要素だけが出てますね』

『僕もそれは無いと思う・・・』

「ええい！ならなんだつたいいのだ！？」「

・・・冒頭から篠ちゃんのネーミングセンスの無さが出てるな・・・
さていよいよお次は我が妹、ラウラの番だ
ラウラは既にスタンバッティング
さて

「ボルフォッグ」

『了解しました、システムチョーンジー！』

ガオガイガーからパトカーが飛び出しボルフォッグが変形する

「ボルフォッグ！！」

ラウラサイド

遂に私の番が来た

この試練に打ち勝てばお兄ちゃんとお兄様と同じ力が得られる
私の相手となるロボットが田の前にいる
先程哥と戦ったのと比べると小型だ、偵察・攪乱用と見るべきか

「私が試練をお相手をする『ボルフォッグ』と申します
「では勇者の試練その三 紫狼牙の試練始め！」

私は先制攻撃の意味を込めプラズマ手刀で攻撃する
がボルフォッグとやらはブーメランのようなもので受け止め私を弾
き飛ばした

「シルバームーン！！」

手に持たれたブーメランが銀色が光り輝いていく

「ハアアアー！！」

それが凄まじい速度で投げられ私に向かってくる
それを軽く避けて見せるが、それがブーメランなだけあり弧を描き
私の背中を掠つた
ボルフォッグはシルバームーンを受け止める

「咄嗟の判断で前に出る事でシルバームーンの直撃を避けるとは・・

・
流石は聖心さんと凱機動隊長が一皿置くだけの事はありますねですが・・・
それでは私には勝てません！シルバークロスー！ハアアアー！・

二つのシルバームーンを交差連結させ手裏剣のようにし投擲する
私は手刀で手裏剣の中心を攻撃するが二つのブーメランに分離し私
に襲いかかってくる

「今です！ガンドーベル！ガングルー！！」

ボーリングノ・シコルスキ・R A H - 66・コマンチに酷似したヘリコプターから変形したガングルー

白バイの状態から人型に変形ガンドーベルが現れる

「三身一体！！」

ボルフォッグは折り畳まれていた体を伸ばし先程とは違ひ大きな体になり

ガンドーベルが左腕、ガングルーが右腕となりボルフォッグと連結する

「ビッグボルフォッグ！！」

すると戻ってきたブーメランを受け止めそのまま

「4000マグナム！..」

ガンドーベルのマフラー部からバルカンを発射する、かなりの弾がラウラに襲いかかる

ワイヤーブレードで弾を弾きそのまま接近し手刀で攻撃する

が

「ムラサメソード！..」

ガングルーのプロペラ部が高速回転させ攻撃を防ぎ盾として使用するラウラはその衝撃を利用し後方に下がるが4000マグナムの容赦ない攻撃が襲いかかる

「（くつ！近づいて攻撃を然ればあの武器で防がれ、後方に下がればこれが！..）

「必殺！大回転魔弾！…」

内蔵ミラー「コーティングを用い、全身に定着したミラー粒子を周囲に向かいに高速で飛ばす
私はそれを回避行動をとりながら反撃の手を考えるが
相手はそのまま突撃していく

「（ニ）のままでは…！回避するのが苦か！いや…これなら…！」

ラウラは手をボルフォッグに向け意識を集中する
するとボルフォッグの動きが停止する

「……これは…AICOですか！？」

「そうだ！待っていたぞこの時を…！」

ラウラは右肩の大型レールカノンを構えボルフォッグに向かい連射する
真っ直ぐにボルフォッグに向かい直撃する

「しまつたああ…！おおおおおおお…！」

ラウラは連射を止めボルフォッグを見ると膝を着いていた

「……お見事です……私の試練の合格条件は相手に対しても自らの武器の使い
チャンスをどう活かすかです、私の試練『紫狼牙の試練』をクリアです

貴女に私の力をお与えします」

ボルフォッグがシュヴァルツェア・レーベンに飛び込みシュヴァル

ツェア・レーゲンと

融合し光を放つ

そして光が收まるとそこにはシュヴァルツェア・レーゲンの基本的なボディはそのままに

肩にはボルフォッグの手裏剣が刻まれ、武装もムラサメソードの強化発展型『レーゲンソード』

4000マグナムの強化発展型『ガンレストウルフ』

「新しい名は・・・シュヴァルツェア・ストーム・・・！」

勇者の試練その三 紫狼牙の試練 紫の狼と勇者の妹！（後書き）

インフィニット・ストラーツ

I S 勇者光臨

N E X T

縁と黄の龍対龍の鈴

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『双頭龍 龍咆』

これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その四 龍の試練 緑と黄の龍対龍の鈴

「どうでしたか！？お兄ちゃん！？」

「ああ、凄かつたぞラウラ、流石我が妹だ」

俺はラウラを膝の上に乗せ頭を撫でてやる、ラウラは気持ちよさでうに体をよじる

最近かなりラウラに甘くなつてきただのが解る、シスコンになつてしまつたか？俺？

実際ラウラは可愛い、ラウラが涙するような事があつたら俺は泣かせた相手が例え神であるうと光にしてやる・・・ふふふ・・・

「ちよつとーーー聖心！早くしなせいよーーー」

「先輩、ラウラを褒めたいのは良く解りますけど鈴が待つてますよ？」

「ああ悪い、じゃあ風龍！雷龍！行つてーーー」

『『『了解！ズージィジャオファン！』』』

そして鈴に向かつたのは中国生まれの勇者
風龍、雷龍が鈴の前に現れた

鈴サイド

私の前に幕が戦つた氷竜と炎竜と似たフォルムのロボットが現れた

「僕達が試練の相手をします、僕の名前は風龍」

「俺の名前は雷龍だ、クリアするには相手の武器の仕方を予想し戦う事だ」

「ではこれより勇者の試練その四 龍の試練を開始する」

ついに私の試練が始まった

風龍は背中の**攬転槽**を肩の上で構える

「ティガオ2 フォン・ダオ・ダン 風道弾！！」

攬転槽から超圧縮空気弾を放ち攻撃する

鈴は大きくジャンプし回避する

「ティガオ2 レイ・ドゥーン！！」

両腕から高圧電撃を放ちジャンプした鈴に攻撃する

鈴は直撃を喰らい体に電流が走るがそんな電流を衝撃砲で打ち消した

「ふん！喰らいなさい！！」

鈴は衝撃砲を連射し攻撃する、雷龍はそれを立て続けに喰らつ

風龍は空気の流れで弾道を感じ取り回避行動をとる

「さつさと合体したらどう！？本氣でやりあいましょう！」

「いいでしょうござれ！雷龍！」

「おうよ風龍！」

「シンメトリカルドッキング！！」

二人の腕は真っ直ぐに畳まれ胸のパーツが迫り上がり頭部が隠れて
そして合体する、攬転槽とガンが腕に装着され手が出てきて、ミラ
ーシールドに胸に着けられる

「げきりゅうじん 撃龍神！！」

「へえ～それが合体した姿って言つわけ?」「そりだ、いくぜ!」

撃龍神は一気に接近し左腕に装備された電磁荷台デンジヤンホーを剣のよつに振るい攻撃する

双天牙月で受け止めるがパワーが段違いなため鈴は押されていく鈴は距離を取らうと後退し衝撃砲の準備をするが

「唸れ疾風、轟け雷光!」

撃龍神の腕にはエネルギーが収束されていき空気が振るえ出す

「な、何!?’
「シャントロン
双頭龍! ! !」

風と雷のエネルギー状の龍が飛び出し鈴に襲いかかる
双頭龍を必死に回避するが双頭龍はどこまでも追尾する

「もひー・しつこーーー!」

鈴は衝撃砲で双頭龍に乱射するが効果は無く
双頭龍が直撃する、そのまま持ち上げられて振り回される

「きやああああーー!」
「はああああーー!」

そのまま地面に呑きつかられピギーーとこう声がした

「・・・」んなものか・・・

撃龍神は深くがっかりしたような声を出す、鈴のHSのエネルギーは0を示してしまったのだ

もう戦う事は出来ない、今回の試練の武器の仕方を予想し戦う事が鈴は戦う事だけに囚われてしまいクリア目的を達成出来なかつた

「・・・龍の試練・・・失格・・・」

無情にも聖心の声が響いた

勇者の試練その四 龍の試練 緑と黄の龍対龍の鈴（後書き）

果たしてこのまま鈴は勇者として認められないのか…？

インフィニット・ストラトス
IS 勇者光臨 NEXT

試される勇気

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『勇気』

これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その五 勇者の試練 試されたる勇気

「聖心…お願ひ…もつ一回やせりせて…」

鈴が俺に頭を下げるもつ一度試練を受けさせてくれと頼んでいの
が勇者の試練は何回も受けさせていいものではない

「…・・・だめだ・・・勇者あの試練は何回も受けさせて良い物では
ない・・・

つと言いたい所だが・・・いいだりつ、ラストチャンスという奴だ
「本当…? ありがとひ…」

「ただし、今回の試練は、俺と戦つてもひつ
「え?」

鈴は拍子抜けしたよつた声を出す

「一時的に撃龍神とのコントラクトが出来るよつてなつて
それで俺と戦つてもらひ、俺にお前の勇気を見せてみひ
「…・・・こいわやつてやうひじやないの…」

そして俺と鈴はアリーナの中央部に立つた

鈴のIASは撃龍神と一体化し撃龍神の武器が腕に装着されている

「ギャレオオオン…!」

『グオオオオン…!…!』

『心…? まさか…?』

『(覗、俺に任せてくれ)』

「フュージョン…!』

俺はジャンプし体を丸めるそれをギャレオンが取り込み変形を開始
前足は手となり、後ろ足は人間のように真っ直ぐとなつた
ギャレオンの頭部は胸部になりそこから人型の頭部が現れる
そして頭部のGストーンが光る

「ガイガー！…！」

ただのガイガーではない、ジェネシックガイガーだ

「ジェネシックマシン！…」

スパイラルガオー、ストレイトガオー、ブロウクンガオー、プロテクトガオー、ガジェットガオー

全てのジェネシックマシンがジェネシックガイガーの回りを躊躇する

「よつしやあああ！…ファインアルフュージョン！…」

ガイガーの腰だけが回転しGURайдのスマートを回転しながら噴出する

その中にスパイラルガオー、ストレイトガオー、ブロウクンガオー、プロテクトガオー、ガジェットガオーが入つてくる

そしてかなりスピード維持したままスパイラルガオー、ストレイトガオーは脚部に向かい

ドリルが膝の部位に移動し、2機のジェネシックマシンの中に足が入り固定される

腕を背に移動させ、ストレイトガオー、ブロウクンガオーは尾の部分がジョイントとなり

肩の中でドッキングし胴体部から腕が出て来る

そして背にガジェットガオーが行き爪でブロウクンガオー、プロテクトガオーをしっかりと掴む

手が付けられ中から黄金に光り輝く、鋭い指が顔を出す
更に赤く光る黄金の蠶が付けられギャレオンの目が輝く
ガジェットガオーから兜が装備されGストーンが輝き、髪の毛が伸びる

「ガオ！ガイ！ガアアアーーー！」

鈴サイド

・・・嘘でしょ？私の前に居るのはあの福音を圧倒したあの形態・
・・

「・・・覚悟はいいか？」

違う・・・何これ・・・」の重々しい声・・・威圧感に満ちた空気・
・・

「、恐い・・・

「勇気を示せ・・・でなければ・・・死ぬぞ」

『心！？何を言つている！？』

するとガオガイガーの全身が深緑のよつた色に染まっていく
何なのよ・・・この威圧感は・・・

ガオガイガーは行動を開始した
腕に力を込め殴ろうとする

「鈴！避ける！？」

鈴は一夏の声に従い回避する、腕は地面に吸い込まれるように叩きつけられた

が地面にはヒビが走った

あ、あんなの一発でも喰らつたら・・・
ガオガイガーは振り返り、鈴を睨みつける
ヒツ！恐いなんてレベルを次元を超越してる！－

「ガジエットツール！－」

『待つんだ心！－それは使つては！－』

ガジエットガオーの頸部の第5節と6、7節が変形し両手に装着され
両手を保護するナックルガードのようなものになる

「ヘル・アンド・ヘヴン！－」

あ、あれって・・・あの技！－
まずい！このままじゃあ！－！－！」うなつた一か八か！－
撃龍神の武装使わせてもらつわ！－

「唸れ疾風、轟け雷光！双頭龍！－！」
（シャントウロ）

風と雷のエネルギー状の龍が飛び出しガオガイガーに襲いかかる
が・・・

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ・・・・」
「負つけるもんですかああああ！－！－！」
『はああああ！－！－！』

その時撃龍神が共鳴し強力な一撃を放つた

ガオガイガーはヘル・アンド・ヘヴンの体制を解いた

「合格だ・・・残りの試練は午後に行う・・・」

そつと書いて脳心はエリを解除して去つて行った

勇者の試練その五 勇者の試練 試される勇気（後書き）

インフィニット・ストラーツ

IS

勇者光臨 NEXT

女神対一人の思い

次回もこの小説にファイナルフュージョン承認！！

『ブルー・ティアーズ 順殺し（シールド・ピアース）』

これが勝利の鍵だ！

勇者の試練その六 女神の試練 女神対一人の思い（前書き）

最近この小説をOPを書きたい作者がいます
前書きになら書いてもいいかな？替え歌だけど・・・

勇者の試練その六 女神の試練 女神対一人の思い

「うう・・・」

俺は部屋で横になる事にした

午後の試練は凱に任せて俺はベットに倒れこんだ
最近、疲労が全くといっていい程抜けない・・・負担を全て俺が一
任してるとから覚悟はしてたさ
凱だってこの苦しみ耐えたんだ俺だって・・・すうすう・・・
俺は意識を手放して眠りに着いた

凱サイド

「では試練を始めるぞ」

どうも皆、獅子王 凱だ

心に変わつて俺が試練の立会人をしている

今回はセシリ亞とシャル、この二人の試練を纏めて行う
正直に言うとこのまま進めるはどうしても勇者になれない人が出で
くる

それを防ぐためだ

そして今回は誰が名づけたか女神の試練・・・光龍と闇龍の試練・・

- どちらが誰の相棒になるのだろう・・・別々になつても予備システムとしても別々でも
- シンメトリカルドッキングは可能だ
- そして今現在光龍と闇龍、セシリ亞とシャルロットが向かい合つて
いる

「これより勇者の試練その六、女神の試練開始！」

まず光龍が肩のパワーメーザーガンを構え攻撃を開始するそれをセシリ亞とシャルロットは軽く回避しセシリ亞はライフルを構える

シャルもアサルトカノン「ガルム」を構え砲撃を開始するミラー・シールドで弾を防いでいる

光龍は闇龍に意識が向いている間にパワーメーザーガンにエネルギーを集中する

「プライムローズの弾！」

パワーメーザーガンから光線を発射しセシリ亞を狙い撃ちにし命中させた

「くつ…やりますわね…」

「伊達に勇者って言われてないもん！」

「シールブルの雨！」

闇龍の背部コンテナから連装で連射しミサイルがセシリ亞とシャルロットに降り注ぐ

「くつ…何で数のミサイルなの…？」

「シャルロットさん！任せてください…行きなさい…ブルー・ティアーズ…！」

セシリ亞はブルー・ティアーズを展開し降り注いでくるミサイルを攻撃する

「シャルロットさん！今です！」

「うん…」

シャルロットは急激にスラスターを吹かし2体に接近する近接ブレード「ブレッド・スライサー」で斬りかかり一人を攻撃しそれはかなりのクリンヒットをした様だそしてシャルロットは最強の武器 灰色の鱗殻^{グレー・スケール}を展開するそれを見事な機動でまずは闇龍の懷に飛び込み灰色の鱗殻^{グレー・スケール}を打ち込んだ

「ああ…！」

「これで…！」

そしてすぐに方向展開し光龍に向かう

「シャルお姉ちゃんやるううう…！」

「これでええええ…！」

そのまま光龍の胸に打ち込む

「ぐううう…！」

「そこまで…！」

俺は戦いを止めた、試練はクリアだ

「私達の試練はクリアです」

「私達のクリア条件はセシリアお姉ちゃん達のが自分の武装の中で最強の武器で

どう使うかなの…」

「それをこきなりやつてのけた、予想外です、では私はセシリアさんに力をお与えします」

「じゃあ私はシャルお姉ちゃんに！」

二人は光になり闇龍はセシリアに、光龍はシャルロットにそれぞれ融合しセシリアのブルー・ティアーズには更にスラスターが追加され

武装もミサイルポッドが腰に追加された

シャルロットの背にはパワーメーザーアームが追加され腰にも小型のビームピストルが追加された

「これで勇者の試練は終わったな、心?何故来なかつた?」

勇者の過去

俺は試練の立会いを終え皆を俺達の部屋と導いている
これからゾンダーの事を話すのだ、俺達の部屋を開けると心が寝て
いた

「・・・お兄ちゃんが寝ているな

「疲れているんだな・・・いきなりジエネシックを使つたんだ
では・・・話すか・・・」

全員にクッショוןに用意して座つて貰い俺は椅子に腰かけた
心もちよづび起きた

「「まず一つ・・・俺達はこの世界の人間ではない」」

「「「「「「「は?」」」」」」」

全員何言つてんの?見たいな顔

「な、何を言つてんすか?先輩?凱さん?」

「何を言い出すかと思えば・・・」

織斑姉弟が声をあげる

「嘘のよつな話と思うが事実だ。でなければGストーンがこの世界
には存在しない」

「お兄ちゃん、お兄様、そもそもGストーンとは何なのですか?」

「疑問に思うのは当然だ

Gストーンは俺の世界の三重連太陽系と言われる星系の縁の星で指
導者力インがGクリスタルから

作った無限情報サー キットだ」

「じゃあGストーンというのは外宇宙から齎された物ですか？」

「そうだ、緑色のエネルギーGパワーを発散しそのエネルギーはゾンダー達が発する

素粒子Z〇と対消滅する関係にあるんだ」

「そのためか、ゾンダーと対抗するために試練を受けさせる必要があつたのは」

流石織斑先生だ

「その通りです」

「だがゾンダーとはなんのですか？お兄ちゃん、お兄様？」

「機械工学と植物を融合した科学の発達した惑星より生まれた機械生命体だ

知的生命体、人間などにゾンダーメタルを寄生させるとゾンダーになつて周囲の機械や無機物と融合し

ゾンダーロボとなつて破壊活動を行んだ、福音とかつてのラウラのようにな

また完全体に成長したゾンダーは無数のゾンダー胞子を放出し数時間で一つの星の全生物をゾンダー化してしまうだ

「恐ろしい・・・」

シャルロットが身体をふるわせる

「ゾンダーがGストーンに触れるといゾンダリアン自体が消滅してしまつ

そしてGストーンの性質だ

持つ者の命の力勇氣に反応して莫大なエネルギーを放出するんだガオガイガー、そして最強勇者ロボ軍団など多くのGGGの装備の動力源となる

劇中において勇者たちの勇氣と並ぶ『勝利の鍵』と云えんだ
そのエネルギーはGミライドによつて抽出され、Gリキッド等と呼
ばれる

そして俺の昔の話に入ろう・・・

凱は淡々と説明を混え自分の過去を話す

GGG機動部隊所属機動部隊長だつた事、宇宙開発公団のテストペ
イロットだつた事

サイボーグだつた事、ゾンダーの戦い、恋人の命の事

「これが俺の世界の話だ・・・心、次はお前だ・・・

全員の視線が心に向く

「・・・俺の世界では・・・この世界、凱の世界は物語となつてい
る」

「・・・・・・・なに!?」

「凱には話したけどな、俺の世界は全くと良い程平凡な世界だつた・

・

大して発達した物は無かつた俺はそんな世界を平凡な人生を送つて
いた

彼女とのデート中に彼女が車に引かれそうになつて俺がそれを庇つ
て俺は死んだ

「ちょっと! お待ちになつてください! 今重要なキーワードが!・

!」

セシリアがもの凄い声で話を止める

「私も・・・! 彼女つて・・・!・

「つてそつちなの! ? 一人共! ?」

鈴が驚く

「そうだ！死んだってどういう事なんですかーー？」

簫が身を乗り出す

「その言葉道理だ、俺は一度死んだ

そして神と名乗る人にこの世界に転生という形で来たんだ」

俺は正直話す事が恐かったが皆は優しく受け止めてくれた
この後簫とセシリ亞そしてラウラに何故か問い合わせられた
生前の事なのに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9410y/>

IS(インフィニット・ストラatos) 勇者光臨

2012年1月5日19時53分発行